117.

611.233-018.73:003.811

二十日鼠氣管枝粘膜ニ於ケル濱崎氏特殊耐酸性顆粒ノ研究

(第 III 報)

本顆粒ノ薬物學的刺激ニ對スル態度ニ就テ

岡山醫科大學病理學教室(主任田村教授)

松田國重

[昭和14年11月6日受稿]

緒 言

余ハ曇=第1報=於テ二十日鼠氣管枝粘膜=於 ケル、濱崎氏特殊耐酸性顆粒ノ組織學的研究ラ、 次デ第 II 報ニ於テ,夫レガ核病理學的檢索ヲ發表 シタガ,本篇=於テハ,之ニ種々ナル薬物ノ應用 ヲ試ミテ、之等ガ特殊耐酸性顆粒ノ形態並ニ組成 ニ、加何ナル影響ヲ與アルカヲ研究シ様ト試ミタ. 即チ先ツ呼吸器審タル「エーテル」ノ吸入ヲ主トシ テ、之ガ特殊耐酸性顆粒ニ及ボス影響ヲ精細ニ觀 察シ、次二「クロロホルム」吸入き行に、更二全然 別種ノ「有毒ガス」ダル「フオルモール・ガス」並ニ 「發煙硝酸ガス」(N2O3)ヲ吸入セシメテ,「エーテ ル」ニ依ル變化像ト比較研究シタ。 尚ホ第 I 報7) ニモ記載シタ様ニ、之等特殊耐酸性顆粒ハ、形態 學的ニ、一種ノ分泌顆粒ヲ思ハシメル所ガアルノ デ、植物神經毒タル、「ピロカルビン」及ビ「アト ロピン」ヲ注射シテ、顆粒ニ對スル其ノ作用ノ有 無ヲ併セ檢シタ.

會驗方法

「エーテル」ノ吸入ニ使用シタ二十日風ハ之ヲ3 群ニ分ケタ。第 I 群ハ「エーテル」ノ吸入時間ヲ限 定シ、 屠殺時間ヲ種々變ジテ、夫レニ依テ起ル特

殊顆粒ノ變化ノ経過ヲ追求シタ、卽チ二十日鼠ヲ 一定ノ硝子容器内ニ入レ、外領ノ流通ヲ可及的避 ケ、別ニ「エーテル」ノ微量ヲ容レタ瓶ヲ共ニ入レ テ,「エーテル」/「蒸發ガス」=依り, 二十日風ガ 全ク深麻酔ニ入リタリト見ラレル時ヨリ10分間 吸入ヲ纏ケタ後容器外ニ出シ、自然鬱醒ニ至リタ ル時ヨリノ時間ヲ種々變更シテ屠殺シタ.第 II 群 ハ同様操作=依り、二十日風ガ深麻酔=入ツテョ リ 10 分間ノ吸入ヲ行ヒ, 整醒後 1 時間ヲ休ンデ更 = 10 分間, 同様ニシテ 10 分間宛, 5 回迄ノ吸入 試験ラ行に、又最後ノ試験ニ於テハ艦醒後40分9 **輝テ屠殺シタ、即チ「エーテル」ノ吸入時間ヲ變ジ** テ, 覺醒後ノ屠殺時間ヲ限定シタノデアル. 大體 覺醒後コノ時間ニ於テ顆粒ノ變化ガ最モ著明デア ル事ハ, 第 I 群ノ實験デ確定シタ、第 III 群ハ第 II 群ト同様, 屠殺時間ヲ覺醒後40分ト限定シ, 比 較的長時間=亙ル吸入 即チ 25 分間廠酔 7 行ツタ. 尚ホ1時間ノ休養ノ上更=25分間ノ麻酔 ワモ試 ミタ. コレ以上ノ吸入ハ生命ニ危險ヲ及ポス爲メ

灰ニ「クロロホルム」へ深麻酔ニ入ツテカラ 10 で 分以上ノ吸入ヲ繼續スル時ハ、飪=死亡スルモノ ガアルノデ、8分間トシ、之ヲ1回吸入ノモノト、 1時間休ンデ更=8分間,計2回ノモノトヲ試ミ,「エーテル」ト同様整醒後40分デ屠殺シタ.「フォルモール・ガス」へ15分間吸入ノモノト、30分間吸入ノモノトラ試ミ, 疑煙硝酸ハ作用が激烈デアルカラ, 7分間1回トシ, 執レモ吸入中止後1時間デ屠殺シタ。尚ホ「ピロカルピン」ハ日本藥局方ノ「鹽酸ピロカルピン」ノ1000倍液ヲ二十日鼠ノ體重20g=對シテ0.1 cc ノモノトの.3 cc ノモノト兩種=分ケテ注射シ,「アトロピン」ハ日本薬局方ノ「硫酸アトロピン」ノ10000倍液ラ同様=注射シ,兩者共注射後25分デ屠殺シタ.

斯クテ居殺後、ノ新鮮ナ肺組織ヲ失々、濱崎氏ノ「クローム」、銅、汞・固定液デ固定スルト共ニ、一部組織ハ硫酸銅ヲ以テ可及的=無水トシタ「アルコホール」デ固定後、執レモ「パラフイン切片」ヲ作ツタ、濱崎氏固定法=依ルモノハ、原則的ニKFJ法=依テ染色シ、其ノ他、「ヘマトキシリン・エオジン」、KFJ法ト「ヘマトキシリン」トノ重複染色ノ他、「アニリン水ダーリア」Ciaccio氏「ズダーン III」等ノ染色ヲ試ミ、「無水アルコホール」デ固定シタモノハ「ブリラント・アズリン・ベー」=依テ染色シタ、

實驗成績

「エーテル」吸入試験第 I 群: 第 1 回. (深麻酔ニ入リテョリ 10 分, 麻酔中屠殺)

「クローム・固定」標本、「ヘマトキシリン・エオジン染色」肺組織へ稍々擴張不全ノ狀ヲ呈シ, 血管充血, 且血管内=於テ溶血ヲ起シテ居ル部ガアル・細氣管校上皮ハ一般=浮腫狀デアルガ特= 圓柱上皮細胞が罎狀=腫大シ,原形質ハ後細顆粒狀=見エル・併シナガラ管腔内=向ツテ膨隆セル細胞端ハ屋々原形質が透明化シテ、 後細顆粒狀ノ構造ヲ全ク失フカ,或ハ部分的=透明化シテキルモノガ多イ・核ハ主=上皮ノ基底部=アツテ,主トシテ長橢圓形又ハ橢圓形ヲ呈シテキルガ,又往々罎狀遊離端=位シ,核素ノ著減シタモノモ見ラレル・

KFJ 法. 氣管核上皮ノ圓柱狀細胞,核共=淡 明デ微細顆粒狀=見エル、細胞ノ境界へ判然トシ テ居ルガ、核ハ判然ト認知シ難イ。呼吸性細氣管 校ノ上皮細胞中ニハ、特殊耐酸性顆粒ガ存在シテ 居ルガ、其ノ大キサ及ビ配列狀態へ正常時ニ於ケ ルモノト變リハ無イ. 但シ其ノ形狀及ピ被染色度 ハ可成り正常時ノモノニ比シテ異ナツテ居ル、卽 チ多クハ滴狀ヲナシテ居ルガ、正常時ノモノヨリ モ幾分不整有稜性ラ示スモノガアリ、顆粒被膜ガ 一方ニ於テ失ハレ、半環狀ヲ呈スルモノガ相當ア ル、正常時像ニ比シテ最モ著明ニ異ナル點ハ其ノ 色調デアツァ、中ニハ正常時顆粒ノ様ニ赤紫色平、 等ニ濃染シテヰルモノモアルガ、多クノモノハ染 マリ方ガ淡イノデアル. 殊ニ被膜ノミ輸狀ニ蓍明 デ,内容ハ空泡狀トナリ,特ニ色調ノ淡ナル顆粒 ハ,膜ノ一部ヲ失ツナキルモノガ多イ。圓形空泡 狀ノ細胞端ヲ覆フテ, 扁平3日月形ニ耐酸性物質 ノ附着セルモノ、 稀ニハ細胞端ヲ細キ線狀ノ耐酸 性物質ガ包ンデキルノモ見ラレル、又粗大顆粒ノ 内容ガ、濃淡異ナル小顆粒ニョツテ充タサレタノ モアル、又被膜ヲ失ツテ内容が園塊駅物質トシデ 現レテキルモノモアル、又粗大顆粒ヲ現ハサナイ 氣管核上皮ノ圓柱細胞遊離端部ヲ注意シテ見ルト 非常ニ微細ナ粉末狀耐酸性物質ヲ認メルモノガ相 當アル. 勿論之ハ全部ノ細胞ニ於テデハナイガ, 正常時ニ於テハ、カカル像ハ絕對ニ見ラレナカツ タ點注意スペキデアル、骰子形細胞、肺胞壁、中 隔等ニ特殊顆粒ヲ見ナイ事ハ正常時ニ於ケル所見 ト同様デアル.

銅・固定標本.「ヘマトキシリン・エオジン染色」 氣管枝上皮細胞端ガ「クローム・固定」/ 時ノ様ニ, 瞳狀ニ腫大スル事ガ少ナイ. 且其ノ部ニ於テ, 原 形質ガ水様透明ニナツテキル部モ非常ニ少ナイ.

KFJ法・特殊耐酸性顆粒ハ, 其ノ大キサガ「クローム・顆粒」= 比シテ大小不同ガ多イ・即チ1μ位カラ5-6μ位= 達スル迄ノ種々ノ大キサノモノガアル、被染色度ハ略ボー定シテキテ, 比較的機染

スルモノガ多ク,「クローム・顆粒」ノ様=中空性, 被膜ノミ輸狀=現レテキルモノハ稀デアル、特= 目立ツノハ、微細粉末狀顆粒が胞體,殊ニ遊離線 ニ近ク,「クローム」ノ場合ヨリモ著明ニ出現シテ 居ル點デアル、細胞端ヲ點狀ニ圍ムモノ, 桿狀ヲ オスモノ,或ハ稍々綿花狀ヲナスモノモアル、又 震染シタ顆粒ノ周圍ノ原形質が紫赤色瀰漫性ニ染 マツテキルモノ、又顆粒狀ヲナサズ,稍々無定形 ニ細胞端ノ形ニ一致シテ,紡錘形ニ染ツテキルモ ノガアル、「フクシン」ニ淡染シ,光線ヲ屈折スル 變性核が所々ニ見ラレル、コノ他比較的淡染シテ 境界ノ鋭利デナイ特殊顆粒中=微細粉末狀顆粒ヲ 少数ニ現ハスモノガアル。

示・固定標本.「ヘマトキシリン・エオジン染色」「クローム・固定」ノモノ=似テキルガ, 繊狀=腫大シタ上皮細胞遊離縁=, 褐色調ヲ持ツタ小體ガ少數=見ラレル.

KFJ法. 上皮細胞原形質へ稍々微細顆粒狀デアル. 特殊耐酸性顆粒ハ一般ニ減少シテ居ル. 且大小不同ガ少ナク, 大體 3-4-5μ程度ノモノガ 揃ツテ居ル様デアル. 周圍ノ被膜ノミ震染ン, 中空性デ, 內容ノ淡染シタ顆粒ガ多イ.「クローム」及ビ銅・固定標本ト異ナツテキル點ハ, 夫等ニ於テ認メラレタ様ナ微細粉末狀顆粒ヲ胞體內ニ全然認メナイ事デアル. 架管枝上皮練ガ所々他部ョリ 稍々震染シテキル所見ハアルガ, 正常時ノ夫レニ 比スレバ, 可成り染り方が淡イ. 架管側枝ノ上皮細胞内ニ特殊顆粒ガ數箇存在シテキル所ガアル.

「ベリツト水」分別標本. 以上第1回標本ニ「ベリリツト水」分別す行ツタモノデ見ルト、「クローム」及ビ鍋・固定ノ標本ニ於テハ、 氣管枝上皮細胞一部稍々濃染スルモノラ散在性ニ見ルガ、 粗大特殊顆粒立ニ 微細粉末狀顆粒乃至物質ハ全タ消失シル居ル. 併シ汞・固定標本デハ稍々逐ヲ異ニシテキル. 即チ「ベリツト水」デ分別シナイ標本デハー 製ニ淡明デアツタ氣管枝上皮ガ著シク濃染シ、細胞端ガ美シキ赤紫色ヲ呈スルモノガ多ク、耐酸性

類脂體顆粒ガ多數=認メラレル、又細胞全體が濃染シ,核ノミ明カルク透明=見エルモノガ相當アル.

「ブリラント・アズリン・ペー染色」、組織ハ青紫色=染ツテキル、氣管枝上皮細胞ハ、稍々銀色=光線ヲ屈折スル淡明ナ分泌顆粒ヲ容レテ居ル、又其ノ顆粒=著明ナル大小不同ヲ呈スル部ガアル、又胞體内=於テ、3—5μ大=不整空泡狀ヲ呈スル部ガアツテ、カカルモノハ等質性=極メテ淡染シ、光線ヲ屈折シナイ、核ハ核膜及ビ核液濃染シ、核素ハ稍々不明瞭デアルガ、核膜ノミ濃染シ內容ハ幾分明カルクテ何物ヲモ認メナイモノ、又ハ青黒色ノ微細顆粒ヲ其ノ内=容ルルモノモアル、向ホ胞體内=核ヲ認メズシテ、青黒色ノ顆粒ガ稍々核ノ輪廓ヲ作ルモノ、或ハ唯2—3ノ顆粒群ノミヲ認メル所モアル、

第1群,第2回.(吸入10分間,覺醒後10分=
テ屠殺): 「クローム・固定」標本. KFJ 法. 氣管
枝上皮細胞ノ原形質ハ淡明, 稍々微細顆粒狀デア
ル. 特殊顆粒ハ或ハ被膜ヲ失ヒ, 或ハ空泡狀=現
レ或ハ塊狀ヲ示シテ, 定型的5--6μ大満狀ヲ呈ス
ルモノハ非常=稀デアル. 2--3μ大デ稍々有稜性
ノモノ, 特殊顆粒ガ数箇ノ小顆粒=崩壊シタ様ナ
狀態ノモノガ多イガ, 全體的=特殊顆粒ノ数ヲ減
ジテ居ル. 之=反シテ微細粉末狀ノ顆粒乃至物質
ガ至ル所ノ氣管枝上皮細胞内=見ラレ, 中=ハ粗
大ナ顆粒ヲ全ク見ナイデ, 微細ナ粉末狀ノモノノ
ミヲ現ス上皮ガアル. 要スル=第1回ノモノョリ
變化ガ著シイ.

KFJ 法並=「ヘマトキシリン」トノ重複染色標本・核ノ變化ハ餘リ著明=認メル事が出來ナイ、唯, 桿狀=濃縮セルモノ, 空泡狀=變化セルモノ核墜=核素ノ集積シタモノ等ヲ見ル・特殊耐酸性顆粒ハ, 細胞基底部=アル核ト細胞ノ遊離線トノ中間部=位置スルモノガ多イ・核ト顆粒トノ關係=就テハ, 正常時所見ト全ク變リハナイ・

銅•固定標本、KFJ法、大體第1回ニ似テキル

ガ、氣管枝上皮=於ケル特殊顆粒ハ可成り減少シテ居テ、稍々淡染シタモノガ混在シテ居ル. 併シ大體=於テハ業赤色=濃染スルモノガ多ク, 形ハ 総分不整デアツテ、顆粒周圍ノ原形質及ビ上皮棒ノ一部ガ着染シテヰル所ガアル. 後細粉末狀顆粒モ稍々少ナイ様デアル.

KFJ 法並ニ「ヘマトキシリン」トノ重模染色標本、遊離線ニ近ク移動シタ核ヨリ突起秋ニ中空性ノ顆粒ノ出タモノ、或ハ半バ變性核中ニ、半バ核外ニ位置スル顆粒モアル、

示・固定標本. KFJ法. 氣管枝上皮細胞ハ第 1回ノ時以上ニ淡染シテ居ル. 特殊耐酸性顆粒ハ 3-4μ程度ノモノガ散在性ニ現レテキルガ, 第1 回ノ時ヨリモ淡染シ, 被膜ノミ濃染シテ指輪駅ニ 見エルガ「クローム・固定」ノモノノ様ニ其ノ被膜ノ一部9失ツテ居ルモノハ比較的少ナイ. 饗細粉末 秋顆粒ハ第1回ト同様全ク見ラレナイ. 氣管枝上皮ノ一部が他ヨリ濃染シテキル所ガアルガ, 稀デアツテ, 其ノ被染色度モ淡イ.

KFJ 法位=「ヘマトキシリン」トノ重複染色標本・報管校上皮細胞ノ原形質ハ淡紫赤色デ、稍々著明=網工狀ヲ呈シテ居ル・其ノ網眼ノ内容ハ可成り屈光性ガ强イ・原形質内=所々核ノ形ヲナシテ網エヲ失ヒ、全ク明カルク見エル所ガアル・周核顆粒様ノ耐酸性物質ハ KFJ 法ト「ヘマトキシリン」兩者=反應スルモノガアル・

第 I 群, 第 3 回. (吸入 10 分間, 覺醒後 35 分デ 屠殺): 「クローム・固定」標本. KFJ 法. 大體第 2 回ノモノト似テキル. 特殊顆粒ノ多クハ基ダシ 夕淡染シ, 被膜ノミ著明ナモノ, 或ハ 2 μ 前後ノ 顆粒が 2--3 箇集ルモノモアル. 又耐酸性物質が 細胞端ヲ線状=包ムモノガアル. 大ナル氣管枝上 皮内=粉末狀顆粒ヲ見ル他=組大ナ特殊顆粒ヲ見 ル所ガアル. 之ハ正常時=ハ見ラレナイ所見デアル.

鋼・固定標本。KFJ法、程大ナ特殊顆粒八第2 同ノモノヨリ僅ニ滅少シテキルガ、粉末駅顆粒ハ 稍々増量シテキル. 特殊顆粒ハ稍々濃淡ノ差ハアルガ,中空性ノモノハ非常ニ少ナイ. 細胞遊離縁ニ向ツテ漸水瀰漫性ニ濃染スル部ガアリ, 其ノ中ニ粉末狀顆粒ノ認メラレル所ガアル. 又粗大顆粒ヲ有セズ微細顆粒ノミヲ有スル気管枝モアル.

示・固定標本、KFJ 法、粗大特殊顆粒ハ愈々減少シ、極メテ少數ヲ認メ得ルノミデアル、且被染色度ヲ減ジテ淡クナリ、影像狀トナリ上皮細胞ト
殆ド判別シ難イ程デアル、粉末狀顆粒ハ全夕認メラレナイ、上皮ノ所々ガ斑紋狀ニ僅ニ濃染スル部
ガアル、

「ブリラント・アズリン・ペー染色」、 氣管校上皮 小農淡被染色度ヲ異ニスル部ヲ相當ニ認メル、 核 膜ノミガ著明デ、核膜ニ接シテ、青黒色不整微細 顆粒ノ附着スルモノガアル、 又核膜ハ著明デアル ガ、内容ハ全ク明カルク、核周部稍々瀰漫性ニ濃 染シ、濱崎氏ノ所謂 Histonlyse ノ像ヲ呈スル所 ガアル、カカル部ニ於テハ、 胞體ノ基質ハ微細顆 粒狀ヲ呈シナイ・ 胞體遊離縁ニ於テ核全體が特殊 耐酸性顆粒=移行シタト思ハレルモノハ、淡青色 ヲ呈シ、内=微細粉末狀ノ「ヒストン顆粒」ガアリ、 殊ニ其ノ周邊部ニ配列サレテ居ル、

「アニリン水ダーリア法染色」、各固定標本ニ就 テ檢査シタガ、特殊耐酸性顆粒ト直接關係アリト 登シキ「ダーリア顆粒」ヲ見出シ得ナカツタ.

顆粒が見ラレルが,特ニ組大顆粒ノ少ナイ氣管校 上皮ニコノ種ノ顆粒が多イ様デアル。

Ciaccio氏「ズダーン III」並=「ヘマトキシリン」トノ重複染色標本、組織ハ一般=淡黄橙色ニ染ツテキルガ氣管枝上皮ハ稍々濃染シテキル・上皮細胞ノ基質ハ微細顆粒狀デ,一部ノ細胞端又ハ細胞全體が他部ョリ特=稍々濃染 スルモノモアル、稀デハアルガ、KFJ法=於テ特殊耐酸性顆粒ノ密集セル部=相當シテ、2一3 μ大ノ、被膜が特ニ濃ク、内部ハ黄金色=光線ヲ强ク屈折スル顆粒ノ認メラレル所ガアル、又1 μ以下ノ小顆粒モ極メテ少数ナガラ認メラレル。

領・固定標本、KFJ法、原形質內=ハ微細粉末 狀顆粒ガ多數=存在シ、殊=上皮遊離線=近夕稠 密=存シ、一部ノ顆粒ハ集ツテ半パ酸合シ、組大 顆粒ノ輪廓ヲナスモノガアル、又瀰漫性=細胞端 ヲ點々ト関ムモノ、或ハ基底部ニ稍々不規則散在 性=現レルモノモアル、中ニハ短イ線狀ヲ呈スル モノモアル、粗大顆粒ハ第1回=比スルト可成リ 少ナイガ、比較的震染シ、中空性ノモノハ非常ニ 少ナイ、併シ震サノ程度ハ第1回,第2回ノモノ ヨリモ淡メ、唯1μ前後ノ小顆粒デハ、中空性輪 狀=現レデキルモノモアル、

Ciaccio 氏「ズダーン III」並=「ヘマトキシリン」トノ重複染色標本.「クローム・固定」ノモノヨ

リモ稍々震染シテキル、殊=氣管枝上 皮ガ著明デ其ノ細胞基質ハ微細顆粒狀 ダガ,「クローム・」ノ時程著明デハナイ、 且「クローム・固定」ノ時程判然トシタ 粗大顆粒ハ認メラレナイガ、 1μ以下 ノ小顆粒ハ見ラレル・

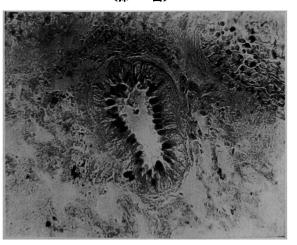
示・固定標本. KFJ 法. 氣管校上皮 モ他ノ部モ全ク同様淡明デ, 僅二紫色 ヲ呈スルノミデアル. 特殊顆粒ノ微細 顆粒モ全ク見出シ難イ.

Ciaccio 氏「ズダーン III」並ニ ~」 マトキシリン」トノ重複染色標本、組

織全體トシテハ稍々濃染シテ居ルガ、氣管枝上皮 ガ特ニ濃染スル事ハナク、他ノ部ト同程度デアル. 唯種々不定ノ形ヲシタ, 黄金色=光線ヲ屈折スル 物質ヲ組織全體ニ不規則散在性ニ見ルノミデアル・ 第1群, 第5回. (吸入10分間, 覺醒後5時間 ニテ屠殺): 「クローム固定 標本. KFJ 法. 粗 大特殊顆粒ハ前囘ヨリモ増加シテ居ル。色調ハ淡 イモノモ相當アルガ,正常時ニ見ラレル様ナ濃ク 染ツタモノモ見ラレル、殊ニ小ナル氣管枝上皮ニ ハ後者ガ多ク, カカル上皮内=ハ粉末狀顆粒ハ少 ナイ. 注目スペキハ正常時ニハ特殊耐酸性顆粒ノ 殆ド見ラレナイ 太イ氣管枝=於テモ 3-5μ 大ノ 顆粒ガ少數出現シテキル事デアル。顆粒個々ノ像 トシテハ大體今迄ノモノト大同小異デアルガ, 稍々特別ナモノトシテハ, 細胞基底部カラ遊離線 ニ向ツテ舌狀=長徑、7-8μ大=長クナツタモノ。 又ハ紡錘形ヲ呈スルモノ等デアル. 又細胞端部= 於テ分泌狀ニ稍々瀰漫性ニ濃染スルモノガアリ、 其ノ内ニ不明瞭ナ粉末狀顆粒ヲ容ルルモノガア

銅・固定標本. KFJ 法. コノ氣管枝上皮ハ甚ダ 特異ナ像ヲ呈シテキル. 即チ小氣管枝ノ上皮細胞 端ハ殆ド悉ク赤紫色瀰漫性=濃染シ, 穗ヲ並ベタ 様ニ業シイ像ヲ早スルモノガ甚ダ多イ(插圖参照)

(播圖)



其ノ瀰漫性=染ツテキル内=網狀ヲ呈スルモノ, 又ハ粉末狀顆粒ヲ藏スルモノガアル、併シカカル 狀ヲ呈スル上皮細胞ノ遊離端以外=於テハ胞體ニ 微細ナ顆粒ヲ殆ド認メナイモノガ多イ、組大顆粒 狀ヲ呈スルモノノ散在性=認メラレル氣管枝上皮 若クハ粗大顆粒ヲ認メナイ比較的太イ氣管枝ノ上 皮内ニハ粉末狀顆粒ガ比較的ニ多イ.

「パリツト水」分別標本. 穂狀ノ美シキ像及ビ他 ノ顆粒モ殆ド完全=星色性ヲ失フ.

汞・固定標本、KFJ法、 上皮線中所々=他ョ リ濃染スル細胞が認メラレ、カカルモノノ内=, 3—4 μ大、中空性ノ顆粒ヲ散在性=見ル、稀=濃 染シタ顆粒ヲ見ル所ガアルガ、微細顆粒ハ見ラレナイ。

第1群, 第6回.(吸入10分間, 登醒後24時間 デ殺ス): 「クローム・固定」標本. KFJ 法. 紫赤色= 濃染シタ定型的特殊顆粒(4-5 μ)が僅二 省加シテキテ, 正常時顆粒=於ケル様=内部網工狀ヲ 呈スルモノガアル. 其ノ他少数ノ淡染シタ特殊顆粒及ビ稍々融解狀ヲ呈スルモノガアル. 又上皮細胞遊離様が瀰漫性= 音染シ, 其ノ基質が微細顆粒ノ觀ヲ呈スルモノガ相當アル. 注意スペキハ融解狀ヲ呈スルモノバ, カカル遊離株部ョリ生ズル像が稍々著明デアツテ, 瀰漫性=淡染セル部ヲ精査スルト, 空泡ガ見ラレル所ガアル. 尚ホ微細顆粒ハ著明=減ジテ居ル.

銅・固定標本. KFJ法. 大體=於テ前囘ノモノト好ク似テ居ル. 上皮遊離線ノ濃染スルモノ, 又ハ粗大顆粒ガ全ク遊離線部=並列スルモノ等ガアル. 粉末狀顆粒モ相當アルガ, 前囘ノモノヨリハ幾分カ大キイ様デアル.

汞・固定標本. KFJ法. 組織ハ淡明デ, 中空性 2-3μ大, 若タハ稀=被膜ノミ著明=濃染シタ 4-5μ大ノ粗大顆粒ヲ僅=見ルノミデアル. 粉末 駅顆粒ハ認メラレナイ.

「ブリラント・アズリン・ペー染色」標本、特殊顆粒ノ被膜ト畳シキモノニ,「ヒストン顆粒」が念珠

駅=連ルモノガアル。

第1群, 第7回, (10分間吸入, 覺配後 48 時間 ニテ展殺): 「クローム・固定」標本. KFJ 法. 前 同二於テ見タ様ニ, 上皮細胞端が瀰漫性ニ紫染ス ルモノ及ビ融解狀ヲ呈シタモノヲ見ナイ. 特殊顆 粒ハ其ノ形が正常時ノモノニ比シテ極メテ値ニ不 整ナ事, 色調稍々淡ナル事及ビ數量的ニ見テ少ナ イダケデ, 殆ド正常時顆粒ニ近イ像ヲ示シテキル. 併シ稀ニ猶ホ中空性ノ顆粒が見ラレルガ, 微細粉 末狀顆粒ハ最早全ク見ラレナイ. 尚ホ稀デハアル ガ, 顆粒内ニ濃染スル中心部ガアツテ, 重複構造 ヲ親スモノガアル.

銅・固定標本、KFJ法、 銅標本=於ケル像モ 可成り正常像=近クナツテキル、即チ類圓形組大 顆粒ハ相常見ラレルガ、粉末狀顆粒ハ甚ダ少数デ アル・但シ顆粒ノ数及ビ大キサ=於テハ、「クローム・顆粒」ト同ジク、縮ホ大キサモ小サク、数モ少ナイ、併シ色調ハ「クローム・顆粒」コリモ濃イ、

派・固定標本、KFJ法、 組織全體ハ第6回ノモノヨリモ濃染シテ居ルガ,「クローム・」及ビ銅・固定デ見ラレタ様ナ充質性ノ顆粒ハ未ダ見ラレナイ、粗大顆粒ハ多ク中空性, 輸狀デアル、

第1群, 第8回. (吸入10分間, 覺醒後1週間 ニテ展殺): 「クローム・固定」標本. KFJ法. 内 容充實性ノ粗大顆粒ハ, 其ノ色調モ, 其ノ大キサ モ殆ド正常時ノモノニ近イ. 敷モ前囘ノモノニ比 スルト可成り多クナツテ居テ, 最早殆ド健常ニ恢 復セル像ト見做シテ好イ.

銅・固定標本, KFJ 法. 顆粒像ハ漿界鋭利デ 前囘以上=正常像=近ク恢復シテ居ルガ, 数ハ豬 未ダ可成リ少ナイ.

汞・固定標本. KFJ 法. 殆ド前囘ト同様デ, 充質性顆粒ヲ認メナイ. 一見淡明デアツテ僅ニ中 窓性ノ顆粒ヲ見ルノミデアル.

第1群, 第9回. (吸入10分間, 覺醒後2週間 ニテ屠殺): 「クローム・固定」標本. KFJ 注. 3-4-6μ大, 境界鋭利ナ定型的特殊耐酸性顆粒 **ラ認メル、即チ前**囘ノモノト大差ナク全ク正常像 ラ示シテ居ル、

鋼・固定標本. KFJ法. 稲ホ徽細ナ粉末狀類 粒ヲ僅ニ見得ル所ガアルガ, 粗大顆粒像ハ・殆ド 正常像ニ近ク, 且其ノ数モ1週間ノ標本ヨリ増加 シテキル.

示・固定標本、KFJ法、2週間ノ標本=於テ
最モ注目スペキハ本汞・固定標本デアツテ、前囘
マデノ實驗=於テハ、淡染、中空性ノ粗大顆粒ヲ
僅ニ見得ルニスギナカツタガ、本標本=於テハ
4―6μ大、粗大充實性、其ノ形、色調及ビ数=於テモ殆ド正常時所見=近キ顆粒ヲ相當數見得ルニ至ツタ、即チ「エーテル吸入」=依テ最モ早ク消失ニ傾ク汞・耐酸性顆粒ガ、最モ遅レテ恢復スルノデアル。

第 II 群, 第 1 回. (吸入 10 分間宛 2 回, 覺醒後 40 分=テ屠殺): 「クローム・固定」標本. KFJ 法. コノ標本ニ於テハー見氣管枝上皮繰が著明ニ 赤紫色ニ濃染シテ居ル、即チ特殊顆粒周圍ノ原形 質が瀰漫性ニ染ツテ居ルノデアツテ、カカル像へ 正常時、銅及ビ汞・固定標本ニ於テハ見ラレルガ 「クローム・固定」ノモノニ於テハ見ラレナカツタ モノデアル、其ノ激染シタ細胞遊離縁ハ網工狀ニ 現ハレ、 又ハ小顆粒群ガ集ツテ蜂窩狀ヲ呈シ, 其 ノ部ニ於テ最モ濃ク, 細胞基底部ニ於テハ全ク淡 染シテ居ル.特殊耐酸性顆粒ハ其ノ濃染シタ上皮 細胞縁部ニ多ク。種々ナ形ヲ現ハシテ居ル、充實 性デ正常時所見ニ近イモノ、又ハ周圍ノ被膜ノミ 農染シテ内容ハ空泡狀ヲ呈スル€ノモアルガ、一 體=8-9μ以上=モ腫大シテ居ルモノガ相當ア り、カカル形タナスモノノ内容へ數箇ノ小顆粒ョ リナルモノガ多イ. 微細ナ粉末駅顆粒モ概シテ細 胞遊離練部ニ多イガ,基底部ニアルモノモアル、 併シカカル微細ナ顆粒ノ周圍ガ特ニ濃染スル像ハ 認メラレナイ.

鋼・固定標本、KFJ 法、 類粒ハ可成り著明デアルガ、形へ稍々小サク、氣管校上皮縁ガ「クロ

一ム・固定」ノ時=於ケルト同樣濃染シテ居ル部ガアル、銅・耐酸性顆粒モ「クローム・顆粒」ノ時ト同様ニ小顆粒ニ分カレル像ハ認メラレルガ後者ノ時程著明デナイ、且其ノ顆粒ノ周國ノ原形質ノ濃染スル部モ、網工狀ヲ呈スル事ガナク等質性デアル、大顆粒デ空泡狀ヲ呈スルモノハナイガ、1μ以下ノ小顆粒デ空泡狀ヲ呈スルモノハナイガ、1μ以下ノ小顆粒デの其ノ內容が周圍ヨリモ幾分カ淡染シテ居ルモノガアル、

汞・固定標本. KFJ法. 組織ハー般=淡明デアル・氣管枝上皮=ハ3ー5μ大ノ特殊顆粒ガ認メラレルガ,輪狀=顆粒ノ周邊部ノミガ濃ク認メラレル、上皮棒ハ極メテ僅=濃染スル部ガアル、微細ナ顆粒ハ全然認メラレナイ.

「ブリラント・アズリン・ペー染色」、 氣管枝上皮 基底部ニアル核ハ、 濃染シテ居ルモノガ多イガ, 遊離縁ニ近イモノデハ、 淡染スルモノ及ビ一部崩 壊狀ヲ呈スルモノ, 又ハ顆粒狀ニ現ハレルモノガ

第 II 群, 第 2 回. (吸入 10 分間宛 3 回, 覺醒後 40 分=テ屠殺): 「クローム・固定」標本. KFJ 法. 特殊顆粒ノ腫大スルモノハ少數デ, 多クハ崩壊シテ不則ナ顆粒トシテ散在シシテ居ル. 其ノ他中空性ノモノ及ビ微細顆粒ヲ相當認メルガ, 要スル=耐酸性顆粒乃至物質ハ, 前回=於ケルョリモ漸欠減少ノ傾向=アル.

銅・固定標本. KFJ法. 特殊顆粒ハ減少シ且 判然タル輪廓ヲ缺クモノガ多ク, 上皮細胞縁ハ等 質性=紫染シテ居ルガ, 前回ノモノニ比スルト著 シク其ノ程度ヲ減ジテ居ル.

汞・固定標本. KFJ 法. 前囘ト同様一體ニ淡明デ,中空性輸狀ノ顆粒ラ少數ニ認メル. 其ノ他胞體間ニ稍々線狀ラナス耐酸性物質ヲ認メル.

第11群,第3 回.(吸入10分間宛5 回,覺醒後40分=テ屠殺):『クローム・固定」標本. KFJ法. 定型的ナ特殊耐酸性顆粒ハ極メテ稀デアル. 即チ粗大顆粒ハ崩壊シテ,粉末狀顆粒,不整形塊狀物質,又ハ線狀物質トナリ,又ハ輪狀ノ小顆粒

ト化シ, 其ノ色調モ極メテ淡ク紫色ヲトルノミデ 上皮棒蓄染部モ少ナク, 色モ淡イ. 粉末狀顆粒ハ 可成り多量デアツテ, 細胞遊離艬部ニ多ク, 基底 部ニ至ルニ從ツテ漸灰少ナクナツテ居ル. 中ニハ 粗大顆粒ヲ有セズ, 粉末狀顆粒ノミヲ有スル小氣 管枝モアル.

鋼・固定標本・KFJ 法・ 顆粒ノ色調ハー鰻ニ 淡ク且紫調ガ强クナツテ居ル・而シテ特長アル滴 狀ラナスモノハ少ナク、不整形トナツテ居ルモノ ガ多イ・上皮棒等質性ニ紫染スル部ニ於テハ、内 =微細ナ顆粒ヲ蔵スルモノガアル・カカル顆粒ハ 併シ「クローム・固定」ノ時ノモノニ比シテ、稍々 桿狀又ハ短線狀ノ形ヲナスモノガ多イノハ注目ス ペキデアル・

汞・固定標本、KFJ法、 粗大顆粒ハ非常ニ稀 デアツテ、僅ニ中空性ノモノヲ 1—2 認メル他細胞 端又ハ細胞間ニ短線狀紫染セル耐酸性物質ヲ所々 ニ見ルノミデアル、氣管校上皮モ僅ニ紫染セルモ ノヲ散在性ニ見ル、

第 III 群, 第 1 囘. (吸入 25 分間 1 囘, 覺醒後 40 分ニテ屠殺): 「クローム・固定」標本. KFJ 法・コノ標本ニ於テモ, 顆粒ガ漸次崩壊消失ニ傾 ク像ヲ呈スル事ハ同様デアル、唯其ノ經過ニ於テ 第 II 群ノ像ト幾分變ツテ居ル. 卽チ本標本ニ於テ ハ第 II 群ニ於ケル 様ニ顆粒が蜂窩狀ヲ呈スル事 ガ少ナク, 粗大顆粒ハ腫大スルガ融解狀デ, 不規 則ナ形トナリ、周邊部ノミ膜狀ニ著明デ、中ニ小 顆粒ヲ藏スル事ガナイ. 而シテ漸次「フクシン色」 ヲ失ツテ被膜ノ一部ヲ失ヒ, 遂ニハ全ク顆粒形ヲ 失ツテ, 耐酸性物質ハ線狀ニ細胞周圍ノ一部ヲ紫 染シ、又瀰漫性ニ原形質ヲ紫赤色ニ染メル様ニナ ル. カカル像ハ第I群デモ見ラレナイ事ハナカツ タガ非常=少カツタ, 即チ本標本=於テハ大體數 箇ノ小顆粒ニ分カレル事ナク崩壊スル像ヲ呈スル モノデアルガ,腫大シタモノガ絞レテ,不規則ナ 大小2筒=分カレタ様ナ形へ見ラレル. 以上ノ他 = 顕粒ガ腫大セズシテ其ノ儘内容ヲ失ヒ、中空性

トナツタモノハ相當見ラレルガ、微細粉末秋ノ顆 粒ハ餘リ著明デナイ、数的=見ルト一般=顆粒ハ 激減シテ居ル、

銅・固定標本、KFJ法、 氣管枝上皮橡ハ赤紫色=染ツテキル、 顆粒ハ本質的=ハ第 II 群二於ケル像ト餘リ變リハナイ、併シ組大ナルモノハ稀デアル、瀰漫性=染ツテ居ル上皮繰ヲ見ルト、 其ノ内=微細ナ顆粒ヲ見ル所が相當アル、又稀ニハ「クローム・固定」ノ時ノ様= 1-2μ前後ノ顆粒ガ2-3集ツテ蜂窩狀ヲ呈スルモノモアルガ、周團モ赤紫色= 濃染シテ居ル為、一見シテハ分カラナイ位ノ程度デアル、即チ本標本=於テハ粗大顆粒ハ殆ド空泡狀ヲ呈スル事ナク、微細ナル顆粒ト、耐酸性物質トハ移行スル像ヲ示シテ居ル.

汞・固定標本、KFJ 法、 空泡狀ノ粗大顆粒ヲ 見得ルガ稀デアツテ、桿狀、 點狀等不規則ナ耐酸 性物質ヲ少數見ルノミデアル.

「ブリラント・アスリン・ペー染色」、氣管枝上皮細胞原形質ハ酸細顆粒狀銀色ニ輝イテキル、細胞遊離端ニハ、青紫色ニ染ツタ等質性無定形物質ガ附着シ、或ハ濃染シタ微細顆粒狀物質ノ附着スルモノモアル、周核顆粒狀物質ノ相當見ラレル所モアル、

第 III 群, 第 2 回. (吸入 25 分間宛 2 回, 覺醒 後 40 分= テ屠殺): 「クローム・固定」標本. KFJ 法. 萎縮不整形ノ 3 μ 前後ノ顆粒ヲ僅=認 ムル他, 細胞内ヲ精査スルト, 微細粉末釈ノモノ, 或ハ融解狀ヲ呈シタモノノ痕跡ヲ所々ニ見得ルノ ミデ, 一見全組機ハ全ク淡明デアル.

銅・固定標本. KFJ 法. 前囘ノモノ=比シテ 上皮縁ノ星色度ガ可成リ減ジテキル他, 粗大顆粒 ハ形ガ小サク且不整トナルモノガ多ク其ノ數モ減 ジテ居ル. 瀰漫性=星色シテ居ル上皮細胞内=ハ 前囘=於ケルト同様微細ナ顆粒ヲ見得ルガ, 之モ 其ノ数ヲ減ジテ居ル. 全體的=ハ顆粒モ耐酸性物 質モ益々減少ヲ來タシテキル.

派·固定標本. KFJ 法. 氣管枝管腔內=土皮

細胞ノ剝脱セルモノヲ見ル所ガアル。氣管枝上皮 ハ淡明デ, 所々胞體間又へ管腔内ニ無定形, 塊狀 ノ耐酸性物質ヲ見ルガ,顆粒狀ノモノハ最早,殆 ノ数的關係ハ次ノ表ノ通リデアル・ ド全ク見出シ得ナイ.

以上ヲ以テ『エーテル吸入」ニ依ル實驗ノ所見ヲ 終ルガ,其ノ各群,各囘ニ於ケル特殊耐酸性顆粒

			第	I	群				
實 駺	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9囘
豊 醒 後 ノ 居 殺 時 間	麻醉中	10分	35分	1時間	5時間	1日	2日	7日	14日
二十日鼠番號	Nr. Nr. 1 2	Nr. Nr. 2	Nr. Nr. 1 2	Nr. Nr. 2	Nr. Nr. 2	Nr. Nr.	Nr. Nr. 2	Nr. Nr. 1 2	Nr.
「クローム・類 粒」	+ + +	+ +	+ +	+ + + + +	+ + + + +	+ + +	+++	++++	+++++++++++++++++++++++++++++++++++++++
銅・顆 粒	+ + + + + + +	+ + + + + +	+ + +	+ +	+ + + + +	+ + + + +	+ + + + +	++++ + + + +	++
汞•顆粒	+ +	+ +	- \	+	+ +	+ +	+ +	+ +	+ + + + + + + + + + + + + + + + + + + +

	弗	1.	<u> </u>	群			
寅	驗	第 1	间	第2	2 囘	第:	3 @
麻醉時間	间數	10分2回		10分 3 回		10分 5 回	
二十日显	番號	Nr. 1	Nr. 2	Nr.	Nr. 2	Nr. 1	Nr. 2
「クローム・	類粒」	++	++ ++ +-	++ + +	++ + +	++++	+++
銅 · 顆	粒	+++	++ ++ +	+++	++ + +	++++	+++
录 • 顆	粒	+	++	+	+	+	+

對照.「クロロホルム」吸入試驗

第1回.(吸入時間8分間, 覺醒後40分ニテ屠 殺): 「クローム・固定」標本: 「ヘマトキシリン・ エオジン染色」。 肺組織ハ部分的ニ擴張不全ヲ呈 シ又充血性ノ所モアル. 氣管枝上皮細胞ハ「エオ ジン」=紅染シ,原形質ハ網工狀=現レテキル. 氣管枝管腔内=出血ヲ見ル所ガアリ, 血管内=於 テ溶血現象ヲ起シテ居ルモノモアル.

KFJ 法、 組織へ淡ク紫染シテ居ル、氣管核上 皮細胞内=ハ, 2μ前後ノ小型ノ特殊耐酸性顆粒 🥫

第	III	群
FF4	111	7.1:

	第 1 回	第2回		
痲醉時間囘數	25分1回	25分2回		
二十日鼠番號	Nr. 1 Nr. 2	Nr. 1 Nr. 2		
「ローム・顆粒」	+ + +	+ +		
銅•顆粒	+ + + + + + + + +	+ + +		
汞 • 顆 粒	+ +			

ガ散在性=見ラレル。其ノ大キサハ略ボ同大デア 、ツテ3-4μ以上ニ塗スルモノハ見ラレナイ. 色調 へ淡赤紫色デ,淡染スルモノガ最モ多イガ, 充實 農染スルモノ及ビ内容中空性ヲ示スモノモ催ニア ル、粉末狀顆粒ハ認メラレナイ、顆粒数ハ正常時 ヨリモ相當減少シテ居ル.

鋼·固定標本. KFJ 法. 氣管枝上皮細胞ガ所々 瀰漫性ニ他部ヨリ濃染シテ居ル所ガアル、特殊耐 酸性顆粒ハ,「クローム固定」ノモノト略ボ同ジ ク,2μ前後ノ小チルモノガ多ク、其ノ数ハ「クロ

ーム・固定」ノ場合ヨリモ裔ホ減ジテ居ル. コノ 他「エーテル吸入」ノ時ニ見ラレタ様ナ後細粉末狀 顆粒が見ラレルガ多クハナイ.

示・固定標本、KFJ法、 組織ハ前兩固定ノ時ョリモ稍々濃染シテ居ル、特殊顆粒ハ 2—5 μ大, 赤紫色=濃染シテ居ルモノガ多ク, 中空性ノモノハ僅デアツテ, 微細粉末狀顆粒ハ見ラレナイ、上皮線僅=他部ョリ濃染スルモノモ認メラレル、注意スペキハ「エーテル吸入」ノ時程汞・顆粒ハ蓍明ー減少シテ居ナイ事デアル。

第2回.(吸入8分間2回, 覺醒後40分=テ展 殺): 「クローム・固定」標本. KFJ法. 第1回 ヨリモ特殊顆粒ハ大ニ減ジ, 3μ前後ノモノラ稀 ニ殺見シ得ルノミデアル. 氣管枝上皮細胞繰ノ催 ニ瀰漫性=星色スルモノ及ヒ上皮内=微細ナ顆粒 ラ散在性=有スルモノヲ見ル.

銅・固定標本. KFJ 法. 氣管枝上皮細胞が瀰漫性=他部ョリ紫染スルモノガ多ク, カカル細胞内ニ, 3μ前後ノ小顆粒ヲ稀= 發見スル他, 後細ナ粉末狀顆粒ヲ中等度= 見ル.

示・固定標本. KFJ 法. 組織ハ「クローム」並ニ銅・固定ノモノョリモ濃染シテキルガ, 特殊顆粒ハ殆ド見出ス事が出來ナイ. 細胞間又ハ細胞端部ニ液狀耐酸性物質ガ見ラレル. 細胞ェ體が瀰漫性ニ紫染スルモノモアル.

對照.「フオルモール・ガス」吸入試験 第1回.(吸入15分間,1時間後屠殺)

「クローム・固定標本」、「ヘマトキシリン・エオジン染色」血管ハ充血性氣管校上皮ノ原形質微細顆粒狀,又ハ網工狀ヲ呈シテキル。 胞體ノ境界ハ比較的判然トシテ居テ,管腔内=出血又ハ分泌物ヲ見ル所ガアル。

KFJ法. 氣管枝上皮へ淡明, 特殊顆粒ハ3—4µ 満狀 アナシテ赤紫色= 呈色シテキル ガ正常時= 於 ケルョリハ形ガ小サク色調モ稍々淡イ. 併シ概シ テ充實性境界鋭利ナモノガ多ク. 比較的小ナルモ ノデハ中空性ノモノモ見ラレル. 数ハ「クロロホ ルム」ヲ吸入シタ時ヨリモ可成リ多イ.

鋼・固定標本、KFJ法、 特殊顆粒ハ3μ前後 デ、比較的境界鋭利デアルガ、淡染スルモノガ多 ク、数モ可成リ少ナイ、微細粉末狀顆粒ハ少数見 ラレル、又無管枝上皮細胞ガ瀰漫性= 濃染スルモ ノガアル、

汞・固定標本、 KFJ 法、 4μ前後ノ境界飲利 ナ特殊顆粒ヲ相當ニ認メル、多クハ充實性デアル ガ内容淡染スルモノモ少数ニアル、變性シテ光線 ヲ屈折スル核ノ周園及ビ胞體間ニ、線狀ノ耐酸性 物質が認メラレル所ガアル、微細粉末狀顆粒ハモ ク見ラレナイ、上皮細胞ノ一部稍々濃染スルモノ ハ認メラレル、

第2回. (吸入30分間, 1時間後屠殺)▶

「クローム・固定」標本. 「ヘマトキシリン・エオジン染色」. 組織ハ可成り擴張不会ノ狀態ニアル. 上皮細胞間が幾分鬆粗トナリ, 細胞ノ遊離線部が 崩壊シテ居ル所モアルシ. 又輕度ノ出血が見ラレル所モアル.

KFJ法. 特殊顆粒ハ 2-3 μ大ノモノガ多ク境 界ノ鋭利デナイモノ、稍々紡錘形ヲナスモノ或ハ 收縮狀不整形ヲ呈シテ淡染シテヰル. 少数デハア ルガ粗大4-5 μ大ノモノハ濃染シテヰル.

銅・固定標本、KFJ法、 粗大顆粒ハ數的ニハ 第1回ノモノト餘リ變リハナイ、寧ロ少シ多キカトモ思ハレル、併シ概シテ顆粒ハ稍や小ナルモノ デ淡染シ、且境界ノ鋭利デナイモノガ相當アル、 粉末狀顆粒ハ第1回ノ時ヨリモ僅二多 イ様デアル、

■ 汞・固定標本. KFJ法. 4—5μ大ノ特殊顆粒 ヲ相當多數=認メル. 第1回ノ時ョリモ寧ロ多イ. 但シ顆粒ハ第1回ノモノニ比シテ内容淡染セルモノガ多イカト思ハレル. 後細顆粒ハ全然認メラレナイ. 上皮細胞遊離縁部=新月狀ニ耐酸性物質ノ附着シテ居ル所モアル. 要スルニ「フオルモール・サズ」 ヲ吸入シタ場合ニハ餘リ著明ナ變化ハ見ラレナイ.

對照.「發煙硝酸ガス」吸入試驗.(吸入7分間, 1時間後屠殺)

「クローム・固定」標本. 「ヘマトキシリン・エオ ジン染色」. 赤血球ノ變形, 溶血現象ガ著明デ, 肺 胞壁, 又ハ中隔ガ崩壊消失ニ陷ツテ居ル所ガアル. 氣管枝上皮ハ荒廢シテ細胞ハ膨隆シ, 一部崩壊又 ハ制殴シ, 其ノ基質ハ小空泡狀ニ腫大スルモノ又 ハ大空泡狀ヲ星スルモノモアル.

KFJ法. 2-5 μ大ノ特殊顆粒ヲ少数ニ見ル. 其ノ小ナルモノノ内=ハ中空性ノモノガアル. 一 見氣管枝上皮ハ淡明ニ見エルガ, 精査スルト, 細 胞内=不整形ナ微細顆粒ノ見エル所ガアル. 又細 胞端が瀰漫性ニ濃ク紫色ヲ呈スル部モアル.

銅・固定標本、 KFJ 法、 氣管枝上皮細胞遊離 端部ハ殆ド悉ク瀰漫性= 紫染シテ居ル、之等細胞 基質ハ全ク等質性= 見エ、稍々屈光性ノモノ或ハ 其ノ瀰漫性= 紫染シテキル内=、 微細ナ顆粒ヲ中 等数容レテ居ルモノガアル、組大ナ顆粒ハ少ナク, 2-5μ大ノモノヲ備= 見得ルノミデアル、

示・固定標本、KFJ法、特殊顆粒トシテハ1— 2μ大ノ小ナル、概シテ中空性、時二充實性ノモノ ヲ極メテ僅二配メ得ルノミデアル、氣管核上皮ハ 概シテ淡明デアルガ、細胞端僅二瀰漫性ニ濃染ス ル所モアル、又細胞内、細胞端或ハ細胞間ニ不整 無定形ノ耐酸性物質ヲ所々ニ見ル。

「ピロカルピン」注射=依ル賞験

第1回. (二十日風體重 pro 20 g = 0.1 cc 注射, 注射後 25 分ニテ属殺)

「クローム・固定」標本.「ヘマトキシリン・エオジン染色」. 肺胞中隔及ビ氣管枝管腔内=出血ノ見ラレル所ガアル. 上皮細胞原形質ハ「エオジン」= 稍々濃淡不同=星色シ、軽度ノ涸濁ヲ思ハシメル所ガアル.

KFJ法. 4-5 μ大定型的ノ特殊顆粒モ見ラレルガ、1μ 前後ノ微細ナ顆粒ガ上皮細胞遊離縁部 = 2-3 簡宛集合シテ居ル所ガアル. 之等顆粒ハ充實性ノモノモアリ、中空性ノモノモアル、又上

皮ノ一部が紫染シテキル所がアル、全體的ニハ類 粒ハ正常時ヨリモ減少シテキル様デアル.

銅・固定標本、KFJ法、コノ標本=於テモ4--5 μ大ノ特殊顆粒モ見ラレルガ、 2-3 μ大ノ稍々 小ナルモノガ相當多イ、氣管枝上皮=於ケル一部 細胞ガ瀰漫性=濃染スル所ガアリ、カカル部=ハ 後細ナ顆粒ヲ細胞内=見ル所モアル、併シ顆粒ハ 殆ド充質性デ、中空性ノモノハ見ラレナイ、全體 的=ハ「クローム・固定」=於ケルヨリモ數ハ多イ、

示・固定標本、 KFJ 法、 特殊顆粒ハ正常時像 ラ示シテ充質性ノモノモアルガ, 又中空性ノモノ モ相當認メル. 又胞體間=無定形ノ耐酸性物質ヲ 認メル所ガアル.

第 2 回. (體重 pro 20 g = 0.3 cc 注射, 注射後 25 分= テ居殺)

「クローム・周定」標本、KFJ法、4-5μ若クハ 夫レ以上=達シ、 濃染シタ定型的ナ特殊顆粒ガ可 成り多イ、又 2-3μ大ノモノガ相當アル所モア ル、第1回=於ケルヨリモ顆粒數ハ可成り多イ.

鋼・固定標本. KFJ 法. 2—3μョリ5μ大=及 ブ濃染シタ定型的ナ特殊顆粒ヲ可成多數=見ル. 第1回ノ銅・固定=於ケルョリモ数ハ多イ又上皮 繰ガ瀰漫性=濃染スル部ガアル.

汞・固定標本. KFJ法. 顆粒ノ大キサ及ビ数 ハ第1回ノモノト餘リ變リハナイガ, 唯充實濃染 ス・ルモノガ比較的少ナク,3-4μヨリ5-6μ=蓬 スル,多クハ中空性ノ顆粒ガ, 氣管枝上皮細胞ノ 遊離綠部ニ, 稍々規則正シク並列ノ狀ヲ呈シテ居

「アトロピン」注射ニ依ル實驗

第1回. (二十日風ノ體重 pro 20 g = 0.1 cc 注射、注射後 25 分= テ居殺)

「クローム・固定」標本. KFJ法. 組織ハ淡明デ 3-6 µ 大充實性, 紫赤色=染ツタ定型的ノ特珠顆粒ヲ相當數見ルガ, 中空性ノモノモアル. 全體的ニハ「ピロカルピン」注射ノ場合ヨリモ少ナイ. 稀= 氣管校上皮繰が瀰漫=稍々濃染スルモノガア N.

鍋・固定標本、 KFJ 法、 紫赤色ニ濃染スル粗 大顆粒ヲ多数見ル、中空性ノモノハ少ナイ、其ノ 數, 色調, 形等殆ド正常時像ニ近イモノデアル、 氣管枝上皮ガ部分的ニ濃染スル所カアリ, 一部液 狀ノ耐酸性物質モ認メラレル、又稀ニ微細粉末狀 ノ顆粒ヲ見得ル所ガアル、

汞・固定標本、 KFJ 法、 特殊顆粒ハ充質性 / モノモアルガ、中空性ノモノノ方ガ多イ、 且其ノ 数ハ一般=非常=少ナク、 液狀ノ耐酸性物質ハ催 ナガラ見ラレル、

第 2 回. (體重 pro 20 g = 0.3 cc 注射, 注射後 25 分= 〒屠殺)

「クローム・固定」標本、 KFJ 法、 2µ位カラ 5—6µ大=達スル商狀組大顆粒ヲ散在性=見ル、 時=ハ中空性ノモノモ見ラレル、其ノ数ハ第1回 =於ケルヨリハ少シク少ナイ、

銅・固定標本、KFJ法、 氣管枝上皮線瀰漫性 = 紫染スルモノガ多イ、 3μ前後ノ稍々小型ノ特 殊顆粒ガ散在性=見ラレル、中空性ノモノハ全タ ナイ、稍々大ナルハ幾分カ境界ガ不鮮明デアル、 第1回= 比スルト顆粒ハ蓍シク少ナイ、

示・固定標本. KFJ法. 3→5 μ大ノ充實性及 ビ中空性ノ顆粒ヲ散在性=見ル. 第1回ノモノニ 比スルト数ハ可成少ナイ.

總括竝二考按

「有番ガス」吸入 = 際シデ, 領道, 或ハ肺胞組織 = 局所障碍ヲ來タス事ハ當然デアツテ, 「エーテル」, 「クロロホルム」等麻酔劑ノ吸入 = 依テモ之ハ認メラレル、先少本質験 = 於テ「エーテル」ノ吸入 = 依リ起ツタ肺臓ノ組織的變化ヲ「ヘマトキシリン・エオジン染色」 = 依テ檢シテ見ル = , 肺組織 = ハ軽度ノ擴張不全が認メラレ, 全體的 = ハ稍々充血性デアツテ溶血現象ノ存スル所モアル・細氣管枝上皮ハ軽度ノ浮腫狀ヲ呈シ, 上皮細胞ハ鰻狀 = 踵脹シ、原形質ハ微細顆粒狀 = 見エルガ, 一部透明化

シテ居ルモノモアリ、中二へ空泡狀二現レテ居ル モノモアル、又氣管枝管腔内二分泌物並二制脱シ タ上皮細胞ノ見ラレル事モアル、核ノ位置的關係 二就テハ、特配スペキ事モナイガ、細胞ノ遊離竭 部ニ存スルモノデハ、核繁ノ蓍シク減ジタモノガ アル、

今,之ト對照的=行ツタ他ノ「ガス吸入」ノ場合トヲ比較スルニ,「クロロホルム」デハ其ノ變化ガ「エーテル」ノ時ト大差ハナイガ「フオルモール・ガス」ノ場合=於テハ、氣管校腔内=分泌物及ビ出血ヲ見ルモノガアリ、30分間ノ長時間吸入ノモノニ於テハ、肺組織ノ擴張不全ノ他、氣管校上皮細胞間が幾分カ離開スル傾向ヲ示シ、細胞端部ノ樹皮と其ノ部=於ケル出血が見ラレル、「發煙硝酸ガス」ノ場合=於テハ、肺組織ノ受ケル障碍ハ可成著明デ、赤血球ノ變形、溶血現象等ノ他、肺胞壁或ハ中隔ノ崩壊、續イテ消失、氣管校上皮ノ荒廢が蓍シク、細胞へ膨隆シテ一部崩壊又ハ大空泡狀=腫大スルモノガアル、

諸種「有毒ガス」ノ吸入=依ル氣道ノ變化=關シテハ、竹內及ビ柳111、服部5)、小趣6)、寺本12)、渡 沙13)等諸氏ノ報告ガアルガ、本質的=ハ孰レモ余ノ上配變化ト大差ナク、唯程度ノ進ム=従ツテ、細胞浸潤、間質ノ増殖及ビ炎症々狀ヲ伴ツテ來ルノミデアル・尚ホ之ハ「ガス吸入」=依ル薬やノ局所的作用トハ全然別デアルガ、本實驗=於ケル「ビロカルビン」及ビ「アトロビン」ノ注射=依ル場合ノ組織像ヲ故=併を記載スレバ、「ビロカルビン」ノ注射=於テモ、肺胞中隔及ビ氣管核形内=、軽度ノ出血ト思ハレル像ガ見ラレルガ判然トシナイ・上皮ハ「エオジン」=稍々濃淡不同=星色シ、輕度ノ温濁ヲ思ハシメル部ガアツタガ、「アトロビン」ノ注射=於テハ、何等特別ノ變化ガリラレナカツタ、

大八特殆耐酸性顆粒ニ就テ記載セントスルノデ アルガ、先ダ「エーテル吸入」= 依ル其ノ数量的關 係ヲ調ベテ見ルニ、第1群ニ於ケル『クローム・顆粒』へ第1囘ニ於テ託=其ノ数ヲ減シ、第2囘ニ於テハ更=減シ、第3囘實驗ニ於テ其ノ減少最モ著明デアル、然ルニ第4囘ノ標本ニ於テハ僅ニ恢復ノ狀ヲ示シ爾後漸灰增数シテ第8囘ノ標本ニ於テハ殆『正常時所見ト見做サルルニ至ツテ居ル、

鋼・顆粒ハ第 I 群, 第 1 同三於テハ其ノ數ヲ減 ズル事が著明デナイガ, 爾後幾分宛減少シ第 4 同 ノ實驗=於テ其ノ頂點=達シ, 後再ピ智數シテ第 8 同, 第 9 回(2 週間)=至ツテ殆ド恢復スル、併 シ其ノ智減ノ曲線ハ「クローム・顆粒」程著明デナ ク, 毎 同 個ノ變動ヲ見ル程度デアル

第1群ニ於ケル汞・顆粒ハ第1囘實驗ニ於テ託 ニ相當ノ數ヲ減ジ,第3回,第4回ニ於テ最モ著 シク減少シテ居ルガ,其ノ後他ノ固定ノ顆粒ト竝 行ニ著明ナ恢復ヲ示サズ,第8回即チ1週間ノ標 本ニ於テ極メテ備ニ恢復ヲ示シ,第9囘ニ至ツテ 俄然トシテ智数ヲ示シ正常像ニ近似スル事ハ注目 スペキデアル.

按二興味アルハ「エーテル吸入」= 依テ正常時 = 於テハ全ク見ル能ハザル,非常 = 後細ナ粉末狀顆粒ヲ生ズル事デ,「クローム・固定」= 於テハ特殊耐酸性顆粒ノ最モ減少セル時期 = 於テ大體最モ多ク現ハレ,特殊顆粒が恢復増加・テ來ルト共ニ,漸次減少シ,實驗第6回即チ覺醒後24時間ノ標本 = 於テハ殆ド消失シ,第7回即チ48時間ノモノニ於テハ最早全夕見ル能ハザル=至ル.

カカル微細顆粒ハ銅・固定標本=於テハ最初ョリ著明=出現シ、時間ノ變化ト共=幾分ノ増減ヲ ボスガ、大體略ポ同量=テ繼續シ、實驗第7回= 至ルヤ大=減ジテ來ルガ、第9回即チ2週間ノ標 本=於テモ猶ホ全然消失スル=至ラナイ、全體的 =見ルト「クローム・固定」ノ時ョリモ粉末狀顆粒 ハ盗=多イ・

汞・固定標本ニ於テハ,總テノ時間的經過ニ於テ,コノ微細粉末狀顆粒ヲ全然認メル事が出來ナイ.

第 II 群ニ於ケル「クローム・顆粒」、「實驗第 1 回 ニ於テ正常時ニ於ケルヨリモ数的ニ増加シテ居ル 感ガアルガ、第 2 回ニ於テハ可成減ジ、第 3 回即 チ吸入 10 分間 5 回ノ標本デハ 更ニ減少シテ居ル。 後細粉末狀顆粒ハ特殊顆粒ノ最モ少ナイ第 3 回ニ 於テモ減少ヲ示サズ可成多量ニ認メラレル。

鍋・顆粒ハ第 II 群ノ第 1 囘ニ於テハ著シキ變化 ハナイガ, 第 2 囘, 第 3 囘ト次第二減少シ微細顆 粒ガ[「]クローム・固定」ノモノニ比シテ多イ事ハ第 I 群ト同様デアツテ, 第 3 囘, 第 3 囘ノ標本ニ於 テモ相當數見ラレル.

第 II 群ノ汞・顆粒ハ第 I 群ニ於ケルヨリモ更ニ 数ヲ減ジ,麻酔回数ノ増加ト共ニ盆々減少スル. 粉末狀顆粒ハ全然認メラレナイ.

次ハ第 III 群デアルガ,「クローム」, 銅, 汞・特 殊顆粒ハ孰レモ急激=減少シ, 實驗第 2 回即チ 25 分吸入 2 回パモノデハ顆粒数ハ激減シ,殊=汞・顆 粒ハ全ク消失スル. 微細粉末状顆粒モ「クローム」, 銅・固定ノ兩者=於テ共=其ノ数ヲ減ジテ居ル.

以上ヲ一括スルニ、「エーテル吸入」=依テ、「入ローム」、銅、汞、執レノ特殊耐酸性顆粒モ其ノ数ヲ減ジ、次第=消失=傾クモノデアルガ、或ル時間的經過ノ後ニハ漸次再ピ正常数=恢復シテ來ル、其ノ消失スル速度ハ、汞・顆粒ガ最モ早ク、「クローム・顆粒」次ニ之ギ恢復ノ速度ハ之ト遊デアル、銅・顆粒ハ其ノ減少乃至消失ハ最モ遲ク恢復ハ前兩者ノ中間ニアル様デアル、唯、第 II 群第1回ニ於テ、「クローム・顆粒」ハ正常時ヨリモ僅ニ特数ヲ示シテ居ル感ガアルガ、之ハ一時的ノ刺激ニ依ルモノデアラウト思ハレル・

顆粒ノ減少ハ「クロロホルム」ノ吸入ニ於テモ見ラレ、「クローム・顆粒」ハ第1同ニ於テ既ニ數ヲ減ジ,第2同實驗ニ於テハ更ニ減少シ,徵細粉末 狀顆粒ハ第1同貨驗デハ見ラレナイガ,第2同ニ 於テハ認メラレル、併シ其ノ数ハ「エーテル吸入」 ノ時程多クハナイ・銅・顆粒ハ「クローム・顆粒」ョ リモ著明ニ減少シ、微細顆粒モ多クハナイ・實驗第

2回ニ於テハ特殊顆粒ハ大ニ減ジテキルガ、 微細 顆粒ハ中等数見ラレル、 汞・顆粒ハ 「クロロホルム 吸入」ニ依テ「エーテル」ノ場合程中空性ノ顆粒ヲ 多ク見ナイ. 数モ餘リ減少シナイ. 併シ「クロロ ホルム」2囘ノ吸入ニ依ル實驗ニ於テハ 顆粒ハ殆 ド消失シテ見ラレナイ. 微細顆粒ハ勿論認メラレ ナイ. 要スルニ「クロロホルム吸入」ニ依テ顆粒ハ 「エーテル 1ノ時ト略ボ相似タ變化ヲ示スモノデア ルガ、其ノ程度=於テ差異ガ認メラレル、然ラバー 「フォルモール・ガス」ヲ吸入シタ場合ノ所見ハ如 何ト云フェ,「クローム・顆粒」へ15分間吸入ニ於 テ僅ニ數ヲ滅ジ,30分吸入ニ於テハ、可成減數ス-ル場合ト、然ラザル場合トアル、即チ或ル場合ニ ハ減少ノ傾向ガアルガ「エーテル」及ビ「クロロホ ルム」=依ル場合程確實性ガナイモノト思ハレル. 鋼・顆粒モ15分間吸入ニ於テ数ヲ減ジテ居ルガ, 30 分間吸入ノモノニ 於テハ 15 分間吸入ノ場合ト 餘り變リガナイ. 寧ロ幾分增數シテ居ルカノ感ガ アル、微細顆粒ハ第1回ヨリモ第2回實驗ニ於ケ ャル方が僅カナガラ数ガ多イ. 汞・顆粒モ第1囘= 於ケルヨリモ第2回實驗=於ケル方ガ寧ロ其ノ數 ガ多イ様デアル.

「疑煙消酸ガス」ノ吸入=於テハ, 3種執レノ特 鉄顆粒モ著明ナ減数ヲ示シテ居ル.

以上記述シタ様ニ、二十日鼠氣管枝上皮内ニ存在スル特殊耐酸性顆粒ハ、「エーテル」、「クロロホルム」、鏡煙硝酸等執レノ「ガス」=依テモ減少ヲ來タスノデアルガ、唯「フオルモール・ガス」ノ場合ハ15分吸入=依テハ減少スルガ30分間吸入=於テ、各顆粒共=増数スル狀態が認メラレル、之へ刺激=依ル一時的現象トモ思惟サレル、唯顆粒数ノ減少ノミ=就テ觀察スルト、最モ作用ノ強イノハ銭煙硝酸デ、次ギハ「エーエル」、「クロロホルム」、「フオルモール」ノ順序トナル。

次ハ特殊耐酸性顆粒ノ形態的變化デアルガ,之 = 先ダチ先ツ一般組織的ノ變化ヲ見ルニ,「クローム・標本」= 於テハ鍋,永標本ト異ナリ,KFJ 法 =依テ氣會校上皮ガ瀰漫性=呈色スル事ハ通常ナイノデアルガ,本實驗=於テハ,第 I 群第 6 同,第 II 群第 1 同二於テ之ガ認メラレル、特殊顆粒ノ位置的關係=就テモ,本顆粒ハ通常第 1 天呼吸性細氣管核以下=出現スルモノデアルガ,本實驗=於ケル第 I 群第 3 同及ビ第 5 同二於テハ,大ナル氣管枝上皮內=,3—5 µ大ノ粗大ナル顆粒ガ少數ナガラ見ラレル事ハ前配上皮ノ呈色現象ト共=正常像ト異ツテ居ル。

次=顆粒自身ノ變化デアルガ、最モ特異ナルハ 微細粉末狀顆粒ノ出現デアツテ、カカル微細ナル 顆粒ハ「クローム」、銅、汞、執レノ固定=於テモ 正常時=ハ全ク見ラレナカツタモノデアルガ、余 ノ第 I 報=於テ記載シタ様=、唯、粗大定型的ナ 特殊顆粒ヲ固定シ得ナカツタ鐡・固定標本7)=於 テ、カカル微細ナル粉末狀顆粒ヲ多ク證明シ得タ 事ハ注目スペキデアツテ、之等ノ開係=就テハ後 =改メテ述ペルデアラウ.

特殊耐酸性顆粒ハ通常 2-3μ カラ 5-6μ大デ アツテ,本實驗ノ第1群第1回=於テハ,其ノ大 キサニ於テ猶ホ變化ヲ認メ得ナイガ,充實性顆粒 ハ爾後其ノ大イサヲ減ズル傾向ニアリ、併シ或ル 時間ノ後ニハ再ビ定型的ナ顆粒ガ認メラレル、即 チ之ハ小顆粒が恢復スルモノデアルカ, 或ハ定型 的ナ新顆粒ヲ生ズルモノデアル. 併シナゼラ其ノ 經過中ニ於デ種々不規則ナ形態ノ顆粒ヲ見ル事ノ 方ガ多イ. 正常時ニ於ケル「クローム・顆粒 八元 來他固定ノ顆粒ニ比シテ最モ單純ナル形ヲ示シ。 略ボ前記大 キサノ顆粒ヲ上皮細胞内ニ見ルノミ デ, 其ノ他特別ナ狀態ヲ示ス事ハ餘リ無イト云ツ テモ好イノデアル.然ルニ本實驗ニ於ケル「クロー ム・顆粒 1八先ツ滴狀類圓形ノモノガ、稍々不整有 稜性トナルモノ、半環狀トナルモノ、蜂窩狀、空 泡狀、塊狀、中ニハ線狀ノ耐酸性物質ト化スルモ ノ、或ハ7-8μ若クハ夫レ以上ノ大キサニ融解狀 ヲ呈スルモノ等様々デアル、倘ゕ特ニ注意スペキ ハ顆粒ノ色調デアツテ、「エーテル吸入」=依テ顆

粒へ形態的ノ變化ヲ起スト共ニ, 定型的ノ紫赤色ニ 震染スル顆粒ハ漸次著明ニ其ノ星色性ヲ失ツテ 來ル事デアル、併シナガラ之等ハ全然別箇ニ考ヘ ルペキモノデナク, 顆粒ノ形態變化ガ色調其ノモ ノニ重要ナル關係ヲ有スル事ハ勿論デアル、

🎍 次ハ銅・顆粒ノ變化デアルガ,氣管枝上皮緣部 ガ瀰漫性=星色スルモノガ相當アルノハ正常時ニ 於テモ見ラレル像デアル、 併シナガラ第 I 群第 5 回ノ標本ニ於テハ, 小氣管枝上皮細胞ガ, 殆ド悉 ク其ノ遊離縁部ニ於テ, 赤紫色ニ濃染シ, 筆ノ穗 ヲ並ペタ様ニ美シイ像ヲ呈シテ居ル、之ハ恐ラク 特別ナ場合=屬スルモノデ,耐酸性物質ノ過剰生 産ト見ラレ、カカル瀰漫性ナ物質ノ一部ハ漸灰塩 界鋭利ナ特殊耐酸性顆粒ニ移行シ得ル場合モアル ノデハナイカト思ハレル。 最モ著明ナ事ハ微細粉 末狀顆粒ノ多イ事デアツテ、「クローム」ノ場合ニ 於ケルヨリモ、稱々桿狀、線狀等、細長キ感ガア ル. 細胞端部ニ特ニ著明デアツテ, 細胞端部ヲ圍 ムモノ、又ハコノ顆粒ガ集リ、半バ融合シテ粗大 顆粒ノ輪廓ヲナスモノ、或ハ細胞基底部ニ不規則 散在性ニ現レルモノ等種々デアリ,遊離縁部ノ瀰 慢性ニ濃染セル内ニ於テモ、多クノ場合認メラレ ル. 本實驗ニ於ケル銅・特殊顆粒ハ「クローム・顆 粒」=比シテ、大小不同ノ差ガ著明デアル、小ナ ルハ1μ位カラ大ナルハ5-6μ位ニ達スル顆粒ガ 相混ジテ居ルガ、吸入ガ反覆サレルニ連レ、又ハ 大量吸入=依テハ、形ガ小サク且漸灰不整トナツ テ來ル、併シ特ニ注意スペキハ其ノ呈色度デアツ テ、「クローム」ノ時ニ於ケル様ニ蓍シク淡染スル 事ハナク、殆ドー定デ充實體染スルモノガ多ク、 内容ノ中空性ヲ示スモノハ稀デアツテ、 2µ前後 ノ小ナル顆粒=於テ備=認メ得ル事ガアルノミデ アル.

・ 次へ汞・固定標本デアルガ、氣管核上皮縁が他 部ョリ濃染スル所見へ、正常時同様認メラレルガ、 本實驗ニ於デハ呈色度ガ正常時ョリモ減ジテ居ル 様デアル、大量ノ「エーテル」ラ吸入セル場合ニハッ 夫レガ特=薯シイ、汞・標本二於テ特異ナ點ハ全 實驗ヲ通ジテ微細粉末狀ノ顆粒ヲ全然見ナカツタ 事デアル・特殊顆粒ノ位置的關係ハ大體正常時所 見=類スルガ,第 I 群第 1 回ノ標本=於テハ氣管 枝ノ上皮細胞内=顆粒ガ数簡見ラレル所ガアツ タ、本質驗=於ケル汞・顆粒ハ一體= 3-4 μ程度 大ノモノガ多イガ,之ガ灰第ニ減少シ,中空性トナリ,被膜ノミ濃染シテ輪狀ヲナスモノガ基ダ多イノデアル、之ガ時間ト共ニ益々淡染シテ來テ周 国ノ原形質ト判別=苦シム様=ナルモノモアル・ 汞・顆粒ノ恢復ハ遅ク充實濃染シタ定型的ノモノ ヲ實驗第 9 回即チ 2 週間ノ 標本=於テ始メテ見得ル=至ル・コノ他汞・標本=於テハ・細胞端,細胞間等=於テ無定形ノ耐酸性物質ガ認メラレル所ガアル・

對照試驗=就テ見ルニ,上皮線ガ瀰漫性=呈色 ヘル像ハ各固定標本共二、「クロロホルム」、「フォ ルモール」,「發煙硝酸ガス」何レノ場合ニモ見ラ レル、微細顆粒ニ就テハ旣ニ記述シタ通りデアル ガ,「クローム・特殊顆粒」の對照3種ノ實験ニ於 テ執レモ大キサヲ減ズルガ、「クロロホルム吸入」 =際シ最モ蓍シク, 疑煙硝酸ノ場合ハ少数ナガラ 5μ程度ノモノ ガ見ラレ淡染中空性ノ顆粒モ見ラ レル、銅・特殊顆粒ハ「クロロホルム」ノ吸入ニ依 リ形ハ小トナリ及ピ数ヲ減ズルガ、「フォルモー ル」ニ依ティ数的差異ハ著明デナイガ、顆粒ハー 體ニ淡且小トナル. 汞・特殊顆粒ハ「クロロホルム」 第1回實驗デハ「エーテル」ト異ナリ2-5µ充實性 ノモノヲ認メルガ第2囘實驗デハ殆ド消失スル. 「フォルモール」ニ依テハ第1囘,第2囘ノ實驗共。 粗大充實性顆粒が相當見ラレ、中空性ノモノガ比 較的少ナイ點,「フォルモール・ガス」ノ汞・特殊 顆粒ニ對スル影響ノ、「エーテル」及ピ「クロロホ ルム」ト異ナル點ヲ明示シテ居ル,

以上ヲ以テ各「ガス」ノ吸入實驗=依ル各固定 顆粒ノ数的竝=形態的變化ノ概略ヲ配述シ終ツタ ガ, 次=之等ノ變化ガ如何ナル経過ヲ取ツテ起リ 且「ガス吸入」ト如何ナル關係=アルカヲ少シク考 察シテ見様ト思フ.

今顆粒變形、本質ヲ考ヘテ見ルニ、執いモ分解 久ハ溶解ニ基ツク崩壊現象ニ他ナラヌ事ハ明カデ アル・「エーテル」及ビ「クロロホルム」が麻酔作用 ヲ有スルト共ニ、類脂體ヲ溶解スル事ハ旣ニ周知 ノ事質デアツテ、之等薬物が吸入時、細胞ノ外部 ヲ形成スル類脂體ヲ溶解41 スルヲ以テ、細胞内ニ 多量ニ侵入シ、麻酔作用ヲ惹起スルモノデアルト モ云ハレテ居ル・同時ニ吸入麻酔劑ハ一定ノ濃度 ニ達スル時ハ、吸收作用トシテ中福神經系ニ作用 スル以外ニ、又局所作用10)ヲ有スルモノデアルカ ラ「エーテル麻酔」ニ依テ肺胞並ニ気道が一定ノ局 所刺激ヲ受ケル事ハ當然考ヘラレル・

扨本特殊耐酸顆粒ガ相當量ノ類脂體ヲ含有スル 事ハ既=余が第Ⅰ報ニ於テ報告シタ所デアルガ、 果シテ然ラバ、吸入ニ依テ氣管枝上皮細胞内=侵 入シテ來タ「エーテル」ガ其ノ局所作用トシテ、之 等特殊顆粒=影響ヲ與ヘルデアラウ事モ亦考ヘラ レル、Meyer u. Gottlieb モ「エーテル蒸氣」ハ大 ナル蒸發性ヲ有スル爲=,組織液中=溶解セル場 合モ容易=組織中=浸潤シテ、錠敏ナル組織ヲ刺 激スルト云ツテ居ル・即チ余ハ本實驗ニ於ケル特 殊耐酸性顆粒ノ變形ハ、恐ラク之等顆粒内=含有 サレル類脂體が「エーテル」=依テ影響サレル事ニ 基ツクモノデアラウト考ヘルノデアル・即チ第Ⅰ 群コリ第Ⅱ間群=至ル「エーテル」ノ量ノ差ニ依 リ、各顆粒ノ變形ノ態度が幾分カ宛異ツテキル事 モコノ理由=依ルモノデハナイナト考ヘル・

先少「クローム・特殊顆粒」ヲ見ルニ,其ノ第Ⅰ群ニ於テ顆粒ガ多ク淡染シテ居ル事ハ、顆粒内ニ於ケル「クローム・耐酸性物質」ノ含量が減少ヲ示スモノデ、顆粒ノ形ノ不整トナル事、顆粒被膜ノ一部ガ失ハレテ居ル事等ハ孰レモ其ノ部ニ於ケルー部類脂體物質ガ「エーテル」ニ依リ侵サレタ爲ニ、顆粒被膜ノ透過性ガ亢マリ、內容ノ漏伯ガ起ツタモノト解シテ好イダラウ、斯クシテ正常時ニ於テ

へ見ラレナカツを種々ノ形ノ耐酸性物質ヲ生ジ, 之ガ後細粉末顆粒トナリ,或ハ細胞遊離端ヲ着染 ムル物質ヲ生シ,前記ノ様ニ新園形ニ細胞端ヲ圍 ムモノ,又ハ塊狀物質等トシア見ラレルニ至ルノ デアラウ.

内最モ興味アルハ微細粉末狀顆粒デアツテ之ハ 粗大顆粒が最モ少ナイ時期ニ最モ多数ニ見ラレル ガ、粗大顆粒ガ漸欠増致シテ來ルト共ニ其ノ数ヲ 減ジテ來ル. 余ハ之等微細顆粒ノ全部ガ粗大顆粒 ヨリヰズルモノデアルト云フ惠ヲ今斷言スル裏ハ 出來ナイガ,其ノ一部ガ組大顆粒ノ崩壊ニ依ルモ ノデアル事ハ誰シモ疑ヒ得ナイダラウト思フ。 「パリツト水」分別ニ依テモコノ微細顆粒ハ全ク呈 色性ヲ失ヒ眞ノ耐酸性物質デアル事ハ確實デア ル、尙水第【群第4回ノ標本ニ於テ見ラレル様ニ。 粗大顆粒全體ガ淡染シ、其ノ内ニ濃染セル微細顆 粒ヲ容レテ居ルモノガアル事等モ、粗大顆粒ガ崩 壊ニ際シ, 微細顆粒ヲ生ジ得ル場合ノ證左トナリ 得ルモノデアル. 時間ト共ニ粗大ナル顆粒ハ漸次 見ラレナクナリ, 2-3μ大ノ顆粒ガ多クナル、殊 ニ内容中空性ノ小顆粒ハ退行性ノモノデアツテ、 内容充實セル小顆粒ハ新生顆粒ノ初期デアルト考 へ得ラレル、又正常時ニ於テハ普通見ラレナイ所 ノ稍々大ナル氣管枝上皮内へノ特殊顆粒ノ出現ハ 呼吸性細氣管枝上皮ニ於ケル特殊顆粒崩壊ニ對ス ル一種ノ代償性ノモノデアルカモ知レナイ。

次=第11群=於ケル「クローム・特殊顆粒」ヲ見ルニ、本標本ニ於テモ氣管枝上皮縁が著明ニ濃染シテ居ルガ、第1群ト異ナル點ハ、コノ著明ニ濃染セル細胞遊離端部ハ網工狀、又ハ小顆粒が融解シタ様ナ狀態ヲ呈シテ居ル事デアル・特殊顎粒ハ8-9μ以上ニモ腫大スルモノガ多ク、カカル形ヲナスモノノ內容ハ數箇ノ小顆粒ヨリナルモノガ多ク、正常顆粒ハ先ツ著シク腫大シ、灰ニ蜂高狀ニ數箇ノ小顆粒群ニ崩壊スル・之コリ其ノ內容タル耐酸性物質ガ周圍ノ原形質中ニ漏出シタモノデアラウ・輸リ大キクナイ顆粒ハ腫大スル事ナク其ノ

儘內容ヲ漏出スル為ニ、中空性ノ中等大ノ顆粒ガ見ラレルガ、之ハ第 I 群ト同様ナ變化ニ陽スペキモノデアル、第 II 群ノ第 2 回,第 3 回賞驗デハ、破壊作用ガ著明デアルカラ既ニ腫大シタ顆粒モ認メラレル事ナク、最後ニハ不規則塊狀、線狀物質ノ他、粉末狀顆粒ノミヲ相當多ク見ルノデアル、上皮棒ノ呈色セル細胞モ少ナク、色調モ淡クナツデ居ル事ハ、漸次耐酸性物質トシテ排泄サレタガ係デアラウ。

大=第 III 群=於ケル「クローム・顆粒」=於テ ハ,第 II 群ニ於テ見ラレタ様ナ蜂窩狀ノ像ハ見ラ レナイ、粗大顆粒ハ腫大スルガ、融解狀デ不規則 ナ液狀形態ヲトリ、周圍ノミ膜狀ニ稍々著明デ、 内=小顆粒ヲ藏スル事ナク, 次第ニ「フクシン」ノ 色調ヲ失ツテ, 被膜ノ一部ヲ失ヒ, 途ニハ全ク顆 粒形蔵ヲ失ツテ來ル、斯クテ耐酸性物質ハ細胞周 邊部ノ一部ヲ紫染シ、又瀰漫性ニ原形質ヲ紫赤色 ニ染メル様ニナル. 卽チ第 III 群ニ於テハ,第 II 群ノ様ニ,大體數簡ノ小顆粒ニ分カレル事ナク崩 **螻スル像ヲ呈スルモノデアルガ、併シ之ハ蜂窩狀** ノ像ノ衣ニ來タルペキモノデ、顆粒ハ一旦蜂窩狀 「トナリ、松ル後=斯ク融解狀ヲ呈シタモノカモ知 レナイ. 微細粉末狀顆粒ハ餘リ著明デナク, 特ニ 第 III 群第 2 囘=於テハ耐酸性物質乃至顆粒ハ旣 = 著シク消失シテ其ノ痕跡ヲ見ルノミデアル. 以 上「クローム・特殊顆粒」ノ第 I, 第 II, 第 III 群ニ 於ケル變形ヲ比較スルニ、第Ⅰ群ノ變化ノ稍々著 明ナル狀態ガ第 II 群デアツテ, 顆粒ハ腫大, 分裂 乃至ハ崩壊狀ヲ呈シ、第 III 群ハ主トシテ融解釈 崩壊デアル.

次へ銅・顆粒デアルガ,之ハ「クローム」ノ様 = 複雑ナ變化ヲ示サナイ. 粗大ナルモノハ「クローム・顆粒」ノ様=踵大スル事ナク,直=中,小ノ数 筒ノ顆粒ニ分裂シ,漸次微細ナ顆粒トナツテ,邊 = 無定形ノ耐酸性物質トナルカ,又ハ粗大顆粒ガ 微細ナル顆粒ト,周圍ノ原形質ヲ紫染スル耐酸性 物質トニ直接崩壊スル事モ考ヘラレル. 最モ「ク

ローム•顆粒」ト異ナル點ハ,粗大又ハ中等大ノ顆 粒ガ、漸次其ノ内容を失つ事ガナイ事デ、コノ點 銅・顆粒ニ中空性又ハ淡染スルモノヲ殆ド見ナイ 譯デアル. 又微細粉末狀顆粒 ヲ 「クローム・固定」 ノ時ヨリモ遙ニ多ク現ハス事ヲ以テモ。 直接微細 顆粒ニ分裂スルノデハナイカト云フ事ガ想像サレ ル、併シ蓍シク長時間ノ吸入ニ際シテハ, 勿論, 淡染,變形,消失=傾クモノガ見ラレル事ハ「ク ローム・顆粒」ト同様デアル。尚ホ「クローム・顆 粒」が第 III 群ニ於テ示シタ様ナ顆粒ノ著明ナ融 解狀態モ銅・顆粒ニ於テハ見ラレナイ. 要スルニ 銅・顆粒ガ「エーテル」ニ依リ崩壊スル事ハ「クロー ム・顆粒」ト同様デアルガ、其ノ崩壊ノ狀態ガ「ク ローム•顆粒」ニ於ケルトハ趣ヲ異ニシ,且『クロ′ ーム」ノ場合程判然トシテヰナイ。即チ「クロー ム・顆粒」ト銅顆粒トノ之等崩壊狀態ノ差ハ「エー テル」ニ對スル顆粒自身ノ抵抗、換言スレバ、兩 顆粒ノ類脂體含有量ノ差ニ由ルモノデハナイカト 思ハレル.

次ハ汞・特殊顆粒デアルガ、コノ變化ハ銅・顆粒コリモ更=單純デアツテ、「エーテル」=依リ顆粒ハ漸次淡染ノ一途ヲ辿ルノミデアル、カクテ內容ヲ全部失ツタ顆粒ハ輸狀ノ被膜ノミヲ建シ、次イデ淡キ影像狀トナリ、途=ハ無定形ノ耐酸性物質トナツテ消失スル、粗大顆粒ガ「クローム」及ビ銅・顆粒ノ様=分裂スル像ハ全ク認メラレナイ、「エーテル」=依テ消失スル速度ハ3固定顆粒ノ内デ汞・顆粒が最モ早ク、其ノ恢復ハ「クローム・顆粒」=及バヌ、又微細粉末狀顆粒ノ全ク認メラレナイ點、「クローム・顆粒」及ビ銅・顆粒ト異ナツテキル、

以上ヲ以テ各固定顆粒ノ「エーテル」=依ル變化 機轉ヲ概各配述シ終ツタノデアルガ, 故ニ最モ興 味アルハ, 微細粉末狀顆粒デアツテ「クローム」及 ビ銅・特殊耐酸性顆粒ガ其ノ崩壊ニ際シテ, 共ニ 微細粉末狀顆粒ヲ生ジ,「バリツト」水分別=依テ 呈色性ッ失フ事ハ, 之ガ眞ノ耐酸性物質デアル事 ラ證スルモノデアルカラ, 之等微細粉末駅顆粒が 特殊耐酸性顆粒ノ重要ナル成分タナスモノデアル 事ハ疑ナイ.

既=記述シタ様=,正常時鐵・固定標本=於テハ,滴狀組大ナル特殊耐酸性顆粒ヲ形成セズシテ,本實驗=見ラレタ様ナ微細粉末狀ノ顆粒ノミヲ固定シ得ルハ,鐵・固定液ガ特殊耐酸性顆粒ノ成分タル微細ナル本耐酸性顆粒ノミハ固定シ得ルモ,「クローム」及ビ銅・固定液ノ如ク,コノ微細ナル耐酸性顆粒ト共=,特殊顆粒ヲ形成スペキ成分タル他種物質ヲ固定シ得ナイ事ヲ證スルモノデアル

今微細粉末狀顆粒ノ数量的關係ヲ見ルニ, 正常 時鐵・固定標本ニ於テ最モ多数ニ現ハレ、次ハ本 實驗=於テ見ラレタ銅・固定標本ノ顆粒デ、「クロ ーム・標本」ニ於テハ、銅・固定ノ場合ヨリ可成少 ナク. 汞・標本デハ金然現ハレナイ. (余八本實驗 ニ際シ,「エーテル吸入」ヲ行ツタ2例ノ鐵・固定標 本ヲ特ニ製作シテ檢シタガ、正常時同様滴狀粗大 · ガル特殊顆粒ハ認メ得ズシテ微細ナル顆粒ヲ著明 ニ上皮細胞内ニ認メタ.)コノ事實ハ核酸及ビ其ノ 分解産物デアル溶騎氏ノ耐酸性顆粒群ノ上位ョリ 漸次下位へ移行スル「クローム・」、鐵・、銅・及ビ 汞・耐酸性顆粒ノ主要成分ノ有スル形態的意義ヲ 裏ヅケル重要ナ役割ヲ演ズルモノデアル。元來濱 **転氏ノ謂フ定型的 (特殊ニアラズ) 耐酸性顆粒ハ** 特殊耐酸性顆粒ニ比スレパ可成り小型ノモノデア ルガ、技二記述サレタ粉末狀顆粒ヨリハ稍々大デ アル、併シ形態的ニ見テモ、本實驗ニ於ケル組織 化學的ノ立場カラ見テモ兩者ノ相似ル事ハ明カデ アツテ、本質的ニハ全ク同一ナル耐酸性物質デア ル事ハ疑ナイ.

鐵・並=銅・耐酸性顆粒ハ相近ク、主トシテ Parinmononucleotide und-side i) ョリナルモ ノデアルカラ、本實驗ノ微細粉末狀顆粒ノ大部分 ハ之等物質ヲ主成分トナスモノト思惟サレル、即 チ正常時鐵・固定標本=見ラレル微細顆粒モ當然 同一物質デアルト見做シ得ル露デ,事實細胞遊離 端部デ之等微細ナ顆粒ガ集リ,租大顆粒ノ輪廓ヲ 示スモノガアル像ハ,織・,鍋・標本ニ於テ共ニ見 ラレ,其ノ性質ノ相似ヲ明カニ示シテ居ル.

「クローム・顆粒」ハ核酸ヲ主成分トシ,ロノ他ニ其ノ分解産物タル Poly-und Mononucleotide 並ニ Nucleoside²⁾ ョリナルモノデアツテ,之等分解産物が微細顆粒狀物質ニ依テ現ハサレル事が考ヘラレル、而シテ本篇ニ於テ既ニ記述シタ様ニ、「クローム・標本」ニ於テ現ハレル微細顆粒ト銅・標本ニ於テ現ハレル夫レトハ,形態的ニ稀々異ナリ,後者ハ前者ニ比シテ、稍々桿狀,線默ノモノブ多ク蔵スル事ハ,兩微細顆粒ノ僅ナル成分的差異ヲ暗示スルモノデアラウ、

斯クテ余へ, 二十日鼠氣管枝上皮ニ現ハレル特 殊耐酸性顆粒ガ、形態的ニハ滴狀粗大ナ特殊ノ像 ヲ示スモ, 内ニ定型的ナ耐酸性顆粒ト全ク同一物 質ヲ有スル事ヲ、本實驗ニ依テ明カニ證明シ得タ ト思フ. 即チ各特殊耐酸性顆粒ハ, 夫々ノ耐酸性 物質ノミナラズ,尚ポ不明ノ物質ヲ含有スル事ハ 云フ迄モナイガ,之等物質ノ一部ハ「エーテル」、 「クロロホルム」=依り溶解サレルモク デアル事 ハ, 之等薬物ニ依テ顆粒ノ崩壊スル事ニ徴シテモ 明カデアル、「エーテル」=依テ溶解サルルモノガ 類脂體ノミデナイ事へ勿論デアルガ,「エーテル」 ニ依テ特殊顆粒ノ含有スル類胎體が溶解サレルデ アラウト云フ事ハ, 少ナクトモ主張シ得ルト思フ. 「フオルモール」 發煙硝酸等ノ對照試驗 = 於 テ モ、顆粒ハ概シテ減少ヲ來タシ、尚ホ微細顆粒ヲ '催ナガラ見得ル場合モアルガ, 之等試験=於テハ 顆粒ノ類脂體ガ「エーテル」ニ依テ溶解サルルガ如 キ,何等系統的ナ分裂像へ見ラレナカツタ. 從ツ テ夫等ノ變化ハ。單=藥物的障碍=依テ惹起サレ タモノト考ヘラレル.

定型的耐酸性顆粒⁸⁾ ハー般=稍々類圓形ナルカ 又ハ稜角性デアツテ,粗大滴駅ノモノノミラ常ニ 生理的=見ル所ノ,二十日鼠氣管枝上皮ノ本顆粒 ハ、正=特殊ナル名称=フサワシイノデアルガ、カカル粗大満狀ノ顆粒形態ガ、二十日鼠ノ氣管枝上皮以外=絶對=見ラレナイモノデハナイ・余ハ家兎ノ1側腎動脈ヲ結紮シタ際=,他側腎細尿管主部上皮細胞內=,本特殊耐酸性顆粒=著シク形ノ類似シタ租大満狀ノ顆粒ヲ,或ル場合相當認メタ・即チ生理的ノ顆粒ガ病理的=ハコノ特殊的顆粒形態ヲトリ得ルモノデアル事が知ラレル・之ト反對=,本實驗=於テハ、生理的=組大ナル顆粒が病理的=微細定型的=近キ顆粒形態=還元シ得ルモノデアル事の興味が深ィ

最後=一言シダイノハ第1群, 第6回=於ケル 像デアツテ,コノ標本ニ於テハ,氣管枝上皮遊離 **縁が瀰漫性=呈色スル部ガアリ、コノ内=微細ナ** ル空泡ヲ認メ,尙ホ之ガ融合セリト見ラレル稱々 粗大すル空泡狀、若クハ稍々液狀ノ顆粒形態ヲ見 ルガ、カカルモノノ他ニ。其ノ空泡狀顆粒ノ周圍 ニ微細ナル粉末狀顆粒ヲ附着スルモノ、又顆粒被 膜ノ稍々観襞ニ富ミ、其ノ内容淡染スル顆粒、又 夫レヨリハ稱々大ナル顆粒デ內容濃染セルモノ等 ヲ見ルガ,大體コノ囘ニ於テハ,顆粒ハ飪ニ恢復 期ノ初期ニ入ツテ居リ、微細粉末狀顆粒ハ殆ド見 ラレナイノデアツテ, 次ノ第7囘ノ標本ニ於テハ 著明ニ正常像ニ近ダイテ居ル點カラ見テモ,以上 ノ所見ハ, 顆粒ノ退行的變性像デハナクテ却ツテ 或へ特殊耐酸性顆粒成立ノ1ツノ機轉ノ段階ヲ暗 示スルモノデハナイカト考ヘルノデアル、

「アニリン水ダーリア」、「ブリラント・アズリン・ベー」Ciaccio 氏「ズダーン III」等ノ染色ヲ試ミタガ、特記スペキ所見ハナカツタ、尚ホ本特殊耐酸性顆粒(殊ニ汞・顆粒)ガー種ノ分泌顆粒ヲ思ハセル形態ニアル爲、「ピロカルピン」及ピ「アトロピン」ノ注射ヲ行ツテ之ガ影響ヲ調ペテ見タガ、銅・及ビ汞・顆粒ニ於テハ多少ノ作用アリト認メラレル像モ、ナイデハナカツタガ、特ニ著シキ影響ハ確認出來ナカツタ。

結論 論

- 1. 二十日鼠=「エーテル」ノ吸入麻酔タ行フ時 ハ、氣管枝粘膜=於ケル特殊耐酸性顆粒ハ崩壊ヲ 來タシテ其ノ数ヲ減ジ、漸次消失=傾クモノデア ルガ、凡ソ7—14日ノ後=ハ再ビ正常数=恢復シ テ來ル
- 2. 特殊耐酸性顆粒ノ消失ハ、「エーテル」ノ吸入時間ノ増加ニ正比例シテ著明トナリ, 其ノ速度ハ汞・顆粒が最モ早ク,「クローム・顆粒」之ニ次ギ, 恢復ノ速度ハ之ト逆デアル. 銅・顆粒ハ其ノ消失ハ最モ遅ク恢復ハ前兩者ノ中間ニアル様デアル.
- 3、「エーテル」ノ吸入=依テ特殊耐酸性顆粒へ 其ノ形並=呈色度=變化タ示ス、形態的=ハ「ク ローム・顆粒」、ノ變化が最モ著明デアツテ、一部 蜂窩狀ヲ呈シ、更=融解狀ヲ呈スル=至ルモノガ アル・呈色度ハ汞・顆粒=於テ最モ著明=減シ、 「クローム・顆粒」之=次ギ、銅・顆粒ハ比較的= 變化ガ少ナイ
- 4。「エーテル」ノ吸入=依テ、氣管枝粘膜=、 正常時=於テハ見ラレナイ微細粉末狀顆粒ガ出現 ムルガ、之ハ明カ=特殊耐酸性顆粒ノ崩壊=依テ 生ズルモノデアル、
- 5. コノ後細粉末狀顆粒ハ、飼・固定標本ニ於テ最モ著明ニ現ハレ、「クローム・固定」標本之ニ次ギ、汞・固定標本ニ於テハ全然之ヲ見ナイ. 而シテ之ハ、「クローム」及ビ銅・特殊耐酸性顆粒ノ最モ減少セル時期ニ於テ最モ多数=現ハレ、特殊顆粒ノ恢復ト共ニ漸失其ノ数ヲ減ジテ來ル.、
- 6. コノ徽細粉末狀顆粒へ形態的=モ、組織化 墨的=モ、濱崎氏ノ定型的耐酸性顆粒ト一致スル、 從ツテ本特殊耐酸性顆粒ノ主成分が耐酸性物質デ アル事へ疑ナク、又本實驗=於テ明カデアル様ニ、 特殊耐酸性顆粒ハ「エーテル」=依テ崩壊スル點ョ リ見テ、之が恐ラク或ル程度ノ類脂體ヲモ合有ス ルモノデアラウ事ガ考へラレル、
- 7. 「クロロホルム」ノ吸入=依テモ程度ノ差ハアルガ,「エーテル吸入」ノ時ト類似シタ顆粒ノ變

化ガ見ラレル.

8、「フオルモール」及ビ發煙硝酸ノ『ガス吸入」 ノ場合ニ於テモ、特殊耐酸性顆粒ハ一般ニ減少シ、 且後細ナ顆粒ヲモ僅ニ見得ル事ガアルガ、特殊耐 酸性顆粒パ「エーテル」ニ依ルガ如キ何等系統的ナ 分裂像ヲ示サナイ、従ツテ之等ノ變化ハ單ナル薬 物的障碍ニ依テ惹起サレタモノト考ヘラレル、 9。「ピルカルピン」及ピ「アトロピン」ノ注射ニ 依ツテハ,顆粒ノ特ニ著シキ變化ハ確認出來ナカ ツタ

終リニ臨ミ御校閥ト御指導ヲ賜リタル田村 教授竝ニ濱崎助教授ニ深謝スル.

附記

濱崎氏ハ最近「石炭酸フタシン氏度法」=際シテ形成サルル紫色々素ヲ試驗管内=化學的純粹=合成シ,之=元素分析ヲ行ヒ其ノ化學構造ヲモ明カニナシ得タ.因ツテ氏ハ從來暫定的=用ヒラレタ耐酸性云々ノ名稱ヲ化學的事實=因ミ 大ノ如ク改称シタ.

耐酸性顆粒=「ケトエノール」(生成)顆粒

Ketoenol bildende Granula

「クローム」=「ケトエノール Cr」顆粒耐酸性顆粒=「ケトエノール Fe」顆粒 鋼・耐酸性顆粒=「ケトエノール Cu」顆粒汞・耐酸性顆粒=「ケトエノール Hg」顆粒 耐酸性類脂體=「ケトエノール」(生成)類脂體

文

1) 濱崎,日新醫學,第27年,第8號,1209頁,昭 和13年. 2) 濱崎,日新醫學,第27年,第6號,915 頁,昭和13年. 3) 濱崎,日新醫學,第26年,第11 號,1650頁,昭和12年. 4) 原,實驗藥理學,27頁, 昭和3年,東京. 5) 服部,京都府立醫科大學雜誌, 第6卷,第5號,2245頁,昭和7年. 6) 小池,實驗 醫學雜誌,第15卷,492頁,昭和6年. 7) 松田,陶 醫雜,第51年,第11號,昭和14年. 8) 松田,岡醫

ঠ

雜, 第52年, 第7號, 昭和15年. 9) Meyer u. Gottlieb, Exper. Pharmakol., S. 69, 1921, Berlin u. Wien. 10) 森島, 藥物學, 237頁, 大正11年, 東京. 11) 竹內, 柳, 國民衛生, 第11卷 後, 1447頁, 昭和9年. 12) 寺本, 愛知醫學會雜誌, 第40卷, 472頁, 昭和8年前. 13) 渡邊, 日本病理學會雜誌, 第23卷, 854頁, 昭和8年.

Aus dem Pathologischen Institut der Medizinischen Fakultät Okayama (Vorstand: Prof. Dr. O. Tamura).

Studien über Hamazakische spezifische säurefeste Granula in der Bronchialschleimhaut der Maus.

(III. Mitteilung.)

Über ihr Verhalten gegen pharmazeutischen Eingriff.

Von

Kunisige Matuda.

Eingegangen am 6. November 1939.

In der I Mitteilung berichtete Verfasser über die histologischen Bilder der Hamazakischen spezifischen säurefesten Granula in der Bronchialschleimhaut der Maus, und in der II Mitteilung über die karyopathologischen Forschungen; diesmal aber handelt es sich um die morphologischen Veränderungen infolge von Anwendung verschiedener pharmakologischen Substanzen. Beim Experiment teilte Verf. die Mäuse in 3 Gruppen ein. Die Maus der I Gruppe brachte er in einer bestimmten Glocke unter, und liess sie dort 10 Minuten lang Ätherdampf inhalieren. Dann tötete er sie in den verschiedenen Zeitabschnitten nach dem Erwachen. Bei der II Gruppe narkotisierte man sie in der Glocke mit Ather 10 Minuten lang. Die Narkose wurde 2 bis 5 Mal wiederholt mit je 1 stündigem Abstand, und alle Tiere wurden 40 Minuten nach dem letzten Erwachen getötet. Bei III wurde langzeitige Narkose von 25 Minuten 1 und 2 Mal versucht und die Tiere ganz gleich wie bei der II Gruppe behandelt. Als Kontrolle wurde eine 8 Minuten dauernde Chloroformnarkose 1 und 2 Mal ausgeführt, ausserdem wurden Formol-Gas-(15 und 30 Minuten) und Nitrogen-Gas-Inhalation (7 Minuten), welche ganz andersartige Gift-Gase sind, angewandt und die Tiere je 1 Stunden nach der Inhalation getötet. Da die spezifischen säurefesten Granula, wie schon in der I Mitteilung berichtet wurde, vermuten lassen, dass es sich morphologisch um eine Art von Sekretgranula handelt, stellte Verf. Untersuchungen hinsichtlich der Wirkung des Pilokarpins und Atropins auf die Granula an. Er injizierte daher den Mäusen pro 20 g 0.1 sowie 0.3 cc 0.1% iger Pilokarpinlösung und auch 0.01%iger Atropinlösung in der gleichen Weise und tötete sie 25 Minuten nach der Injektion.

Das Lungengewebe wurde mit dem Hamazakischen Cr.-, Cu.- und Hg.-Fixierungsgemisch, ausserdem ein anderes Stück mit Alkohol, der mit Cup. sul. völlig wasserfrei gemacht wurde, gehärtet, und nach der Regel stellte man Paraffinschnitte her. Die nach der Hamazakischen Methode hergestellten Präparate waren prinzipiell nach der KFJ-Methode gefärbt, ausserdem wurden Hämatoxylin-Eosin, Doppelfärbung nach KFJ-Methode und Hämatoxylin, auch Anilinwasser-Dahlia und Ciaccios Sudan III Färbung benutzt. Die mit Alkohol fixierten waren mit Brillant Azurin B tingiert. Zuerst untersuchte Verf. eingehend die durch die Ätherinhalation verursachten verschiedenen Veränderungen der Granula, dann verglich er diese mit den durch andere Mittel verursachten Veränderungen der Granula, und erzielte dabei folgende Resultate:

1) Wenn man die Maus Äther inhalieren lässt, zeigen die spezifischen säurefesten Granula die Neigung zu zerfallen bzw. sich aufzulösen und nehmen an Zahl ab, um allmählich im Schwund zu geraten. 2) Der Schwund spezifischer säurefester Granula wird je nach Zunahme der Inhalationsstunde deutlicher, seine Geschwindigkeit ist an der Hg.-Granula am grössten, dann kommen die Cr.-Granula. Ebenso erfolgt ihre Wiederherstellung in umgekehrter Reihenfolge. Die Cu.-Granula scheinen in ihrem Schwund

am langsamsten zu sein und ihre Wiederherstellungszeit findet zwischen denjenigen der oben genannten beiden Granula statt. 3) Durch Ätherinhalation zeigen die Granula an Form und Färbbarkeit eine bestimmte Veränderung. An den Cu.-Granula sind morphologische Variationen sehr deutlich bemerkbar: es kommt nämlich in einem Tei dieser Granula eine wabige Struktur zum Vorschein, jedoch lösen sie sich allmählich auf. Was die Färbbarkeit anbelangt, so verlieren die Hg.-Granula sie zuerst am deutlichsten, dann die Cr.-Granula, aber an der Cu.-Granula können wir relativ geringe Veränderungen finden. 4) Bei der Ätherinhalation treten zahlreihe staubseine Granula in der Bronchialschleimhaut auf, was normalerweise gar nicht stattfinden, und was zweifellos von dem Zerfall spezifischer säurefester Granula herrühren dürfte. 5) Im Cu.-Präparate sind diese feinen Granula am deutlichsten, sodann im Cr.-Präparate, im Hg.-Präparate jedoch findet man sie gar nicht. Es ist besonders bemerkenswert, dass diese feinen Granula dann am deutlichsten sind, wenn die Cr.- und Cu.-Granula an Zahl am geringsten sind, und sie sich allmählich mit der Wiederherstellung spezifischer säurefester Granula vermindern. 6) Vom morphologischen und histochemischen Standpunkt aus stimmen diese feinen Granula mit den Hamazakischen typischen säurefesten Granula überein; es ist also hochstwahrscheilich, dass sie die Hauptbestandteile der spezifischen säurefesten Granula sind. Auf Grund diesmaliger Untersuchung, bei welcher der Zerfall spezifischer säurefester Granula klar zu sehen ist, können wir nicht irrtümlich annehmen, dass die spezifischen säurefesten Granula vielleicht mehr oder weniger Lipoid enthalten. 7) Bei der Chloroforminhalation zeigen die spezifischen Granula, wenn auch nicht so deutlich, eine ähnliche Veränderung wie die bei der Ätherinhalation. 8) Bei der Formol- und Nitrogen-Gas-Inhalation nehmen die spezifischen Granula im allgemeinen an Zahl ab, zuweilen werden sogar geringe feine Granula angetroffen; die spezifischen Granula zeigen jedoch keine systematische Umformung wie beim Äther. Hieraus können wir schliessen, dass diese Veränderungen nur durch Ortreiz der Mittel verursacht wurden. 9) Bei der Injektion des Pilokarpins und Atropins konnte man keine sichere Wirkung auf die spezifischen säurefesten Granula wahrnehmen. (Autoreferat)